

乳幼児期の育ちと保育を考える

# 幼児の教育

特集

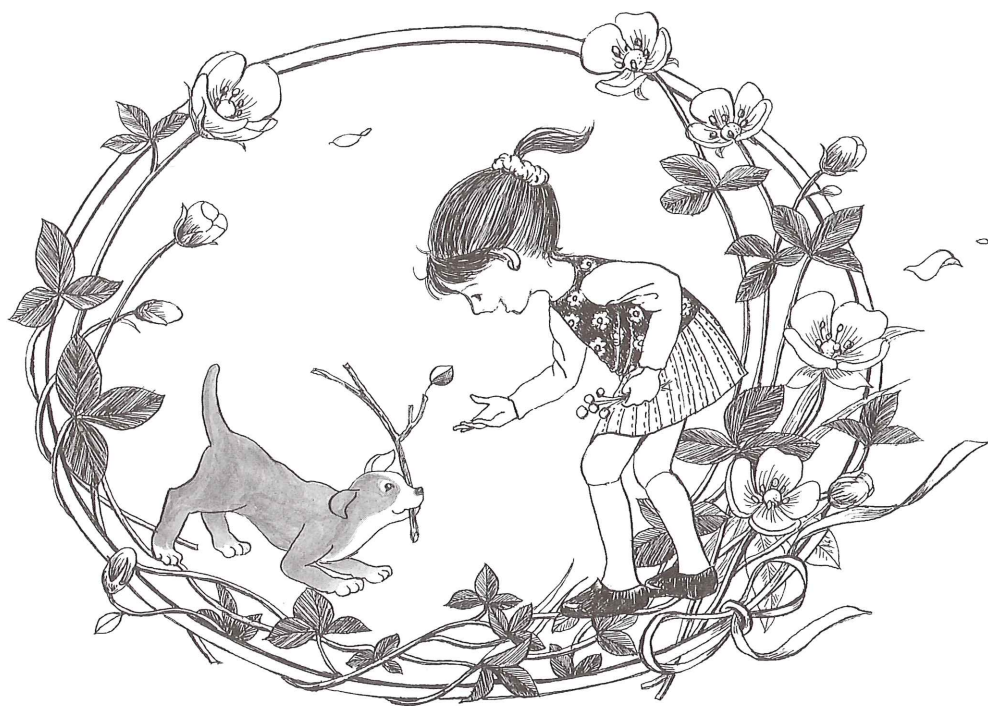
創刊110年企画

『幼児の教育』

アーカイブズ集 2

2

2011  
特別号



好評発売中

● シリーズ 3 巻完結! ●

総勢101人から贈られた、保育へのメッセージ

# THE 保育 -101の提言- vol.3

無藤 隆 編著



10503

26×19cm 226 ページ 定価 2,100 円 (税込)

21 世紀の子どもの育ちをどう捉え、どう見据えて  
いか、様々な分野の著名人による保育への提言。  
vol.3 は、フレーベル館の保育図書編集委員のほか、  
保育研究者や各界の著名人の提言も掲載した完結編。

## 執筆者 (50音順)

網野武博(東京家政大学教授)、池谷祐二(脳科学者)、池谷奉文(日本生態系協会会長)、石津ちひろ(絵本作家)、内田麟太郎(絵詞作家・詩人)、大澤 力(東京家政大学教授)、大日向雅美(恵泉女学園大学大学院教授)、岡本弘子(高崎健康福祉大学短期大学部教授)、落合恵子(作家・クレヨンハウス代表取締役)、かづきれいこ(フェイスナルセラピスト・歯学博士)、金井真介(ダイアログ・イン・ザ・ダーク・ジャパン代表)、上遠恵子(レイチェル・カーソン日本協会会長)、小林紀子(青山学院大学教授)、古賀稔彦(柔道家)、小菅正夫(獣医師・旭山動物園園長)、佐伯一弥(東京家政大学短期大学部専任講師)、佐々木宏子(鳴門教育大学名誉教授)、汐見稔幸(白梅学園大学

短期大学学長)、柴崎正行(大妻女子大学教授)、鈴木 寛(文部科学副大臣)、鈴木光司(作家)、高橋 和(女流棋士)、ダニエル・カール(タレント)、苔米地英人(脳科学者)、長倉洋海(写真家)、長崎宏子(スポーツコンサルティング会社取締役・元五輪水泳選手)、浜 美枝(女優)、パトリック・ハーラン(タレント「バックンマッくん」)、細谷亮太(小児科医・聖路加国際病院副院長)、増田まゆみ(目白大学教授)、師岡 章(白梅学園短期大学教授)、山極寿一(国際霊長類学会会長・京都大学教授)、葉 祥明(絵本作家)、吉村作治(エジプト考古学者)、渡邊真一(学校法人初音丘学園理事長)

好評発売中



10501

## vol.1

### 【執筆者】

小柴昌俊(ノーベル物理学賞)  
椎名誠(小説家)  
田原総一郎(ジャーナリスト)  
坂東真理子(評論家)  
日野原重明(医者・文化勲章)  
やなせたかし(絵本作家)

ほか多数



10502

## vol.2

### 【執筆者】

アグネス・チャン(タレント・日本ユニセフ協会大使)  
紺野美沙子(国連開発計画親善大使・女優)  
ピーター・バラカン(ブロードキャスター)  
村上康成(絵本作家)  
米村でんじろう(サイエンスプロデューサー)  
ほか多数

キンダーブックの  
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。



# 幼児の教育

第110巻 第2号

---

## 目次

---

● 巻頭言 ●

月刊『幼児の教育』特別号のモチーフ（２）

—「保育史」という視点を日ごろの保育に— 浜口順子

4

● — 歴代編集主幹による — 『幼児の教育』にかけた思い（２） ●

倉橋惣三氏の遺産を継いで 本田和子

8

● 特集 ●

創刊 110 年企画『幼児の教育』アーカイブズ集 2

保育実践者による語りや記録

— 保育を再構成する実践の知 — 塩崎美穂

14

第 29 回日本保育学会「幼稚園創設百年記念公開座談会」より

「1930 年代の実践を語る」（第 75 巻 第 11 号より）

菊池ふじの

鈴木とく

海 卓子

---



乳幼児期の育ちと保育を考える

# 幼児の教育

第110巻 第2号

幼稚園の一年間 (第63巻第6号より)

「三才児の生活」 村石京子

「四才児の友だち関係とごっこあそび」 関 治子

「五才児の一年間」 守永英子



● 園のくらしを育む 11 ●

子どもたちの姿(1)— 知恵が生きる協働の過程 — 秋田喜代美

54

● 保育の現場から ●

「こわれること」と「新しく始めること」 宮里暁美

58



# 卷頭言

## 月刊『幼児の教育』特別号のモチーフ(2) —「保育史」という視点を日ごろの保育に—

浜口順子

### 「保育史」という視点

『幼児の教育』が、一九〇一（明治三四）年に創刊されてから一一〇年になります。前号から第一一〇巻に入ったのを機に三回にわたり「特別号」を組むことにしました。今号はその二回目になります。

今回の「アーカイブズ特集」では、保育者自ら保育カリキュラムについて語る記録が扱われています。戦争で焦土と化したわが国が平和な社会を築いていこうとしていたころ、また、高度成長期に入り知識や技術を子どもに上から注入する教育が勢いづいてくる中でも、乳幼児保育の現場では、吹きつけるその時代の逆風から子どもを守り一人ひとりの子どもがその子らしく生きられる環境を工夫して作っていました。幼稚園、保育園、国

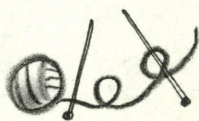
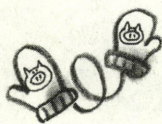




公立、私立の違いはあっても、このような過去の保育者たちの業績の上に現在の保育があり、今、私たちが頭を抱えて解決策を模索している保育上の諸問題が、昨日今日始まったものではないことを実感させられます。

大学の授業で学生たちに、本誌に掲載された戦前戦後の論文や保育記録などをコピーして読ませると、とても興味をもちます。昔の保育論と今の保育論の違いを感じると同時に、共通に流れているものを見いだしたり、また過去を踏まえて今があるということに気づいたり……。言ってみれば当たり前のことなのですが、昔の保育を過去の文脈の中で実感する経験は、意外にも、現在の保育者養成や教育・発達を専門とする学部教育においても決して重視されているとは言えません。過去を踏まえるというと、ルソー、ペスタロッチ、フレーベルなどの歴史上著名な人物について教わることに勘違いする傾向があるようです。それも大切ではありますが、その人物たちはその時代に生きていたのであり、その時代が抱えていた保育・教育の問題のただ中で格闘していた人たちであったということが忘れられては意味がないでしょう。そして、それにもまして、過去においてどれだけ多くの名もなき人たちが、どのような苦勞をし、迷い考えながら保育実践をし、よりよい保育を追求してきたのかということを経験で感じる想像力が、保育や幼児教育の学びをよりおもしろく豊かなものにするに違いありません。





## 「保育史」を伝える「保育誌」

お茶の水女子大学図書館では大学における教育研究成果のレポジトリ（ＩＴ保管）化を進めており、二年ほど前から『幼児の教育』誌の一〇〇年分以上にわたるバックナンバーもすべて電子データ化し、インターネットでいつでも誰でも自由に読めるシステムを作りました（ただし最近三年間のものは未公開です）。

試しに「食」という言葉を検索してみました。今でこそ「食育」という熟語と切っても切り離せない言葉ですが、食育基本法が施行される二年前の二〇〇三年、小川清実氏は厚生労働省が「食を通じた子どもの健全育成」のことを「食育」と呼び始めたことを受けて、「私にとっては『食育』という聞き慣れない言葉であるが」（乳幼児期の『食』を考える（１） 第一〇二巻第十二号 p. 11-12）と論じています。当時、私自身も感じた「食育」という語への違和感を思い出します。

「食」から検索された記事は全部で十四件でしたが、最も古いものは本誌が創刊された年、一九〇一年の飯島八千溪氏という信州伊那出身の人による「食はず嫌い」という投稿記事です（第一巻第十号 p. 55-56）。「食物の好き嫌い<sup>このくらい</sup>わ、全く、我儘<sup>わがまま</sup>から来るので、一年三百六十五日、此位<sup>このくらい</sup>親に迷惑を掛け、心配させる事ありません」という一文から始まり、麦のにおいが嫌で食わず嫌いをしている娘が栄養不良で病気になるたが、行者に





拝んでもらったら、神様のバチが当たるのが怖くて食べるようになり病氣も治った、というのですから、まさに隔世の感があり興味深いです。第二次世界大戦のさなか、一九四三年（第四十三巻）三月号の「玄米食と野菜」という記事（p.42）では、「昨今油脂の配給も少ない折柄でございますので」油脂を多く含む豆類から摂取しようと書かれ、枝豆の栽培方法が詳しく教示されています。食と育児の関係ははつきりと時代を映していて、逆に現代の「食育」も五〇年後にはどう見えるのか、思いをはせてみるのも有意義なことに違いありません。

文化人類学の世界で、異文化社会に入って社会の多様なあり方を記述したものを「エスノグラフィ」民族誌」と言います。こちらの価値観に相手を吸収して説明するのでなく、相手をその全体性、多様性のままに理解しようとする方法はエスノグラフィ的な方法です。雑誌の「誌」も記述されたものの集成物を意味します。「幼児の教育」という一世紀以上にわたる記録を読者が「保育誌」として対話的に読み、それぞれが「私の保育史」を過去と対話しながらイメージできたらどんなに素晴らしいでしょう。「保育誌」に込められた過去の人たちの声や息遣い、思い、生活観、価値観に関心を開き、現代の保育・幼児教育にかかわる私たち自身の心的知的パースペクティヴ（地平）を新たに作る、そのような保育史研究が求められていると思います。

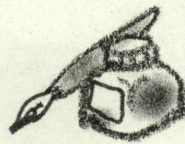
（お茶の水女子大学大学院准教授）



— 歴代編集主幹による — 『幼児の教育』 にかけて思い (2)

## 倉橋惣三氏の遺産を継いで

本田和子



◇ ◇ ◇

『幼児の教育』誌と倉橋惣三の不可分の結び付きは、改めて云々するまでもなく、周知のことからでしょう。時には、本名・筆名・匿名などと、書き手の名前まで自在に操作しながら、一誌まるごと自身の文章で埋めてしまったという有名な逸話や、あるいは、保育事情視察のために、広く欧米を飛び回るといふ慌ただしい日程の中でも、編集部宛の折々の寄稿は怠らなかつたという本誌への愛情など、倉橋なくして本誌の歩みを跡付けることは不可能とすら言えそうです。

そしてまた、「倉橋なくして本誌があり得なかつた」との同時に、倉橋に關してもまた、「本誌なくして、倉橋も倉橋たり得なかつた」と言えるかもしれません。何しろ、倉橋の保育に寄せる思いのすべてが、この誌上で言葉を与えられ、読み手に届けられるメッセージとして現象し続けたのですし、その結果、全国に彼の信奉者が増え続けたことは



紛れもない事実でした。そして、全国の信奉者たちは、しばしば「倉橋教信者」などと揶揄やゆされたりするほどの熱心な読者群を形成し、本誌と、また倉橋の思想と実践を、支え続けたのでした。

たとえ、創設者が東基吉であつたにしても、この雑誌を一〇〇年を越える日本最古の教育月刊誌として存続させ、また、長く保育界をリードする指導的地位に立たせ続けたのは、ひとえに、編集主幹としての倉橋の力でした。彼の主幹在任は一九一一年からおおよそ四〇年の長きにわたつていたのですが、その間、彼は、本誌の編集と無数の読者との応答を通して、単なる研究者でも編集者でもない「唯一無二の倉橋惣三」へと脱皮転生を繰り返し、ついには「かけがえない日本のフレイベル」へと成長を遂げていったものと思われまふ。この雑誌は、彼にとつて、単なる所信表明の道具でも新しい知見や情報を発信するツールでもなく、自身の成長を見届ける鏡でもあり、また、その成長が全国の保育実践者たちと共有可能であることを確認する媒体でもあつたのではないでしょう。

私は、お茶の水女子大学に在職した二〇数年を、本誌とかかわりを持って過ごしてきました。ある時は、編集主幹津守真教授の協力者として、また、氏の退官後は編集の責



を担って……。ところで、改めて振り返るとき、その時期の私は、ただひたすら倉橋の遺産に絶<sup>す</sup>りつつ、月々の雑誌を世に送ることに努力していたのだとの思いに駆られます。「編集会議」と名付けられた小さな集まりの折にも思いを巡らすのは、倉橋の遺された「編集方針」、というよりもっと簡単な「覚書」程度のメモ。でも、集められ並べられる予定の記事に思いを巡らしつつそのメモと照合させ、「これでよいのかな」「最近、特に不足している分野があるのではないか」などと見直したりするのが常だったからです。

倉橋の遺産というのは、要約すれば次のようなものでした。

本誌は、幼稚園・保育所・家庭などで、乳幼児の保育に従事する人々に向けて、その実践を支え、同時に心の養いとなるべきものであること。そのためにも、優れた現場実践に言葉を与えて、これら読者たちの共有可能なものとなすこと。と同時に、広く内外の研究動向にも目を配り、幼児の発達と保育にかかわる最新の情報を伝達することに意を用いること。つまり、個々の実践という私的記録を、実践のよきサンプルとして公の記事として掲載する一方で、いわゆる学問研究の世界での最先端とされる情報をも漏れなく収集し、提示する責務も担わねばならないというわけです。

実践の記録とそれに付加された解釈や考察は、単なる個人の記録に止まることなく、学術研究の分野でも十分に機能するものであるべきでしょう。そして、既存の学問分野



を活性化し、固定化した斯界に新たな動きを導き出し得るよう力あるものでなければなりません。そのためにも、関連する諸分野の研究動向や最先端の果実にも目配りすることが肝要であるというのでした。

これらに加えて、倉橋が書き遺したのは、以下のことがらでした。この雑誌には、常に、かぐわしい「文化の香り」が漂っているべきであり、本誌を手に取り、頁を繰りつつ記事のあれこれに目を配るとき、読み手たちは、そこから匂い立つ「文化の香り」に癒され、「心豊かな」ひとときを送ることができねばならないと、最後の一味の大切さを訴えたのでした。

日本画の泰斗東山魁夷や、著名な人形作家山田徳兵衛などの絵や記事が誌面を彩り、また、泰西の名画の複製が一隅にひっそりと置かれるのなど、いずれもこの「文化を香り立たせる」営みだったことでしょう。何しろ、倉橋自身も、絵画や文学、あるいは歌舞音曲の世界にも明るい趣味人だったようです。



さて、この記事のねらいは、徒に倉橋を顕彰することではなく、倉橋の遺言が私の編集の導きの星であったということです。そして、今にして思うのは、私にできたのは、倉橋が最後に付け加えたこと、すなわち「文化の香り」を忘れないでという部分だった



ようです。私の補助者として事務処理をしてくれたのが、皆川美恵子氏・小沢譽子氏など文系に強い人たちだったということもありましょう。さらに、この期間、思いがけない研究者たちとの深い出会いもあって、『幼児の教育』は、大変、面白くかつ有意義な足跡を残すことができました。そこで、一つ二つ例を挙げて、「私の編集を振り返る」という、与えられた責を果たしたいと思います。

まず、挙げなければならないのは、森洋子氏のブリュッゲル研究でしょう。ピーター・ブリュッゲルは、一六世紀フランドル地方の民衆風俗や農民生活を描き、農民画家などとも呼ばれた画家の一人です。そのころ、お茶の水女子大で非常勤講師として「美術史」を担当していたのが、このブリュッゲル研究者として著名な森洋子氏でした。豊富な図版の紹介とともになされるその講義が、学生たちを魅了しているらしいことを耳にした私は、森氏に次のような依頼をしました。「『幼児の教育』という月刊誌に掲載したいので、ブリュッゲルの『子供の遊戯』を解説して、二、三回分の記事を作ってほしい」と……。専門の美術雑誌でもないこの雑誌に、貴重な原稿を頂けるかしらと遠慮がちな依頼でした。

引き受けてくれた氏のその後は、「美術史とはこんな学問だったのか」と、分野を異にする私たちの目を見張らせることばかり。「どうしても確かめたいことがあるから、ベルギーに行ってくる」「ドイツの美術館で調べ物をしてくる」などと、アツという間



に海外に飛び立っていく森氏。担当の皆川氏は、原稿がもらえなくて何度、慌てなければならなかったか。その都度、筆の早い私が「穴埋め原稿」に精を出す羽目となりました。しかも、軽く二、三回のつもりが、二年を越える大連載となり、完成後は分厚い単行本として高い評価を受けた次第です。

幾つかの学会賞や「サントリー学芸賞」などの評価の高い文化賞、あるいは、ベルギーの「王冠勲章シュバリエ章」など、数々の栄誉が燦然とその本を飾りました。授章式場で、「この仕事は、『幼児の教育』誌の依頼から始まりました。根気よく、連載に付き合ってくれた同誌の編集部に感謝します」と森氏が挨拶されるとき、私たちは、半ば恐縮し半ば誇らしく、何やら不思議な感慨にとらえられたものです。音楽学者の海老沢敏氏の『むすんでひらいて考』も、同じような経緯で世に出て、同じような栄誉に包まれた本でした。

保育界の実践力の向上を目指した本誌が、ある時期、こうした営みで文化研究に貢献したことを、今、懐かしく想起します。でも、これらの仕事は、「保育の世界にかくわしい文化の香り」という倉橋の思いに、果たして、どの程度適うものであったかと、月刊誌の幕の降りる今、心もとなく、申し訳なく、思い出したりしている昨今ですが、ご協力頂いた皆様に改めて感謝の意を表して筆をおくことにいたしましょう。ありがとうございました。

（お茶の水女子大学名誉教授）



◆ 特集 ◆

創刊二一〇年企画 『幼児の教育』アーカイブズ集 2

## 保育実践者による語りや記録

### — 保育を再構成する実践の知 —

塩崎美穂

『幼児の教育』は、保育現場に働く多くの実践者に支えられてきた雑誌です。いつの時代の誌面にも、読者あるいは執筆者としての保育実践者のものの見方が反映されています。戦前戦後を通して、この小さな本には、「現場」からの声が響いているのです。

実践者に読まれることを期待して編まれてきた本誌は、日本の保育実践の歴史において、日々の保育の継承や刷新を実践者自身が考える媒体として、小さな役割を果たしてきたのではないのでしょうか。

アーカイブズ企画二回目の今回は、現場の人に

よって話されたことや書かれたことに注目し、実際の保育が、どういう考えのもとに生み出されてきたのかを振り返ってみたいと思います。それは、保育の実践と理論が交錯し、実践者と研究者が交流するという『幼児の教育』のもつ重要な機能について再認識する作業にもなるでしょう。まず、一九三〇年代の代表的な保育実践者、菊池ふじの氏、鈴木とく氏、海草子氏の語りに耳を傾けてみたいと思います。

用字等、なるべく原文のまま掲載するようにしました。



# ◆「実践」という言葉の意味

一九三〇年代、日本の教師たちは「教育実践」という言葉を使い始めました。<sup>註1</sup>それは、戦争へ向かう抑圧的な時代にあっても、権威ある学者の学説や理論をただ受容するのではなく、自らが展開する教育の事実を科学的に問い直すという主体的な自覚の表明でした。<sup>註2</sup>つまり「教育現場は時々の為政者に無批判に追従したり、研究者が紹介する教育理論をただ適用するところではない。まさに、教育を実際に行う教師こそが、教育と研究を行う主体でなければならない」という積極的な意志が、「実践」という言葉の意味するところだったわけです。

一九七六年に保育学会で「実践」を取り上げた際の壇上が、一九三〇年代に活躍した保育実践者自身の「実践のおもしろさ」や「指導理論」という語りに彩られたことは、保育実践史上、必然的な流れだったように思われます。

このとき、一人目に登場したのは、誘導保育実践

者として著名な、女子高等師範学校（現在のお茶の水女子大学）附属幼稚園の菊池ふじの氏でした。彼女が実は用務員のおばさんから小言を言われるような型破りな実践者であり、おそらくこうした「あそび」こそが誘導保育の原動力であっただろうことなど、興味深い実践の実際にふれることができます。

二人目は東京帝国大学（現在の東京大学）セツルメントの託児部（保育所の前身）で活躍した鈴木とく氏です。当代きつての理論家との話し合いでも、実践している者にしかわからない世界についてひるまず発言していた様子がわかります。画一的であることを嫌い、すべての子どもの尊厳を守ろうとした彼女の姿勢からは、今こそ実践の思想として学ぶものがあるように思います。

最後に海卓子氏が、公立幼稚園について話しました。研究者の理論どおりになどいかなない職員集団や管理的体制の中で、時代や慣習に翻弄されない保育を構想する実践への希望が語られています。

以下、実践者三人の語りを聞いてみてください。



一九七六年『幼児の教育』より

## 第二十九回日本保育学会

「幼稚園創設百年記念公開座談会」より

### 一九三〇年代の実践を語る

菊池ふじの

皆様こんにちは。本年は女子高等師範学校、今のお茶の水女子大学に附属幼稚園が創設されて百年、そのうちの四十年を私はこの幼稚園でご厄介になったのでございます。それでこの度だけはこの会への出席をお断りできないだろうと、しぶしぶ今日まかりでました次第でございます。

一九三〇年前後の実践者としてという課題をいただきましたのですが、私がここの幼稚園に就職しましたのは、一九二四年、大正十三年でございます。一九三〇年と申しますと、昭和五年でございますね。

そんなことを考えまして、その頃自分がやったこと、また私のお勤めしておりましたここのお茶の水幼稚園全部で皆でやったことをお話し申し上げます。

私が幼稚園の先生になった時、はじめの二、三年はもう自分の組のことだけしか考えられませんでした。だが、少し経験を重ねてまいりますと、少し視野が広がって、幼稚園全体を考えるようになりました。その当時、一般の幼児教育界では、いろいろなさつていらしたんですが、そういうことは、あまりおぼえておりません。まったく井の中の蛙でございました。研究会とかそういうものも、当時はございませんでした。のんびりとお子さんと一緒に遊んでいられたので、たぶん幸運だったとも、一方では考えております。

私は女高師の三年の時から倉橋惣三先生に、家庭教育と児童心理のお講義をうかがいました。先生のお講義は大変に興味深く、私は先生を非常に尊敬いたしました。いろいろの点で先生から目を開いていただきました。私が学生の時代には教育の学説と



して、ジョン・デューイの学説とか、ダルトン<sup>\*</sup>・プランの話とかをうかがって、心から共鳴し共感しておりました。

卒業いたしましたして幼稚園に奉職いたしました大正十三年には、園舎はすっかり丸焼けになっておりまして、お粗末なバラックが漸くできあがっております。机とか椅子、砂場、ジャンブルジムとかブランコ、そんな最低限のものがあつた程度でございました。先輩の、あるいは前にいたお子さんの作品とか、そういう歴史を物語るものは何もなかったのでございます。それに私の性格がおつちよこちよいなものですから、なんにもそういう以前のこと、周囲のことは考えず、ただ、倉橋先生のお講義で聞いておりました、「子どもたちに目的を持たせよ。そうすれば子どもにネセシティーを感じさせて、子どもたちは乗ってくる」というお言葉を心の中心におきました。ですから、いろいろ考えて、子どもたちに興味のあることを提案し、それをクラスのテーマとしました。あとで誘導保育という言葉が倉橋先生に

よってつけられましたが、私は、就職のはじめから、そのようなテーマを考えて、クラスの子どもたちと一緒にやって参りました。

思い出しますと、お茶の水のあの聖橋ができたのは丁度、私が奉職した大正十三年の四月頃でございました。学校の花壇が聖堂の近くにありましたので、毎日子どもたちを連れて行つては、遊んだり、お花をつんだり、聖橋を見たりしたものですから、聖橋は子どもたちにも印象深く心の中にしみていったようでした。それであの聖橋をみんなで作りたいしょうと提案しましたところ、子どもたちは大賛成でしたので、粘土で作ることにしました。ちょうどその頃、お部屋にサンド・ボックスがありまして、畳一帖ぐらいのですね、その上に砂をいっぱい入れまして、それからお茶の水川を開いて、その上に聖橋をみんなで力を合わせてこしらえたのでございます。今も忘れられないのですが、その時の用務員のおばさんに、私が粘土をあまりたくさん使うので、「あなたの組は、あんなに粘土を使って何をやって



いるんです」と小言を言われたのを覚えています。そんなふうにして、いつも主題といいますが、テーマと申しますか、そういうことを中心にして生活してきました。

目的を持つということが私を感じたのは、おかあさんたちが、幼稚園に朝送ってきて、「先生、うちの子は今日○○をするんだと言うんですけど、どういうことなんですか」とか、「今日は箱で人形を乗せる車を作るんだと言っているんですけど、どういうことなんですか」と聞かれるんですね。そういうことで、子どもというのは朝出る時から今日は幼稚園で何をしようという目的を持って来るんだな、目的を持ってやって来ることはとっても望ましいことだということを感じました。そういうことに勇気づけられて、つねにテーマを考えて、それを中心にやってまいりました。でも時々、作ることの面白さにまぎれて子どもたちの心身の発達にかたよりがあつてはいけないということを考えて、自分をいまいめました。子どもたちにはほ

んと好きな遊びをさせながら、バランスのとれた教育をということを常に考えておりました。それから一人一人の子どもの欲求とか個性というものも、忘れないように注意しておりました。

倉橋先生の保育の原理は自由であり自発であるとお講義で伺っていたのですが、その自発について、私は以前からなやんでいました。子どもたちから自発的に保育の課題を出すということはなかなかないんですね。子どもたちから出た自発を中心に保育をすすめるということとは、最高だと思うのですが、実際にあたってみますと、私の長い経験でも、子どもたちからの自発は一つか二つ位なんです。一日の保育でもって、子どもの自発を生かしてと心がけていても、なかなかそういう機会がないんでございます。それである日、倉橋先生に「先生の保育の原理の一つは自発ですけれど、子どもたちの自発から保育を引き出すことはとてもむずかしい。自発はなかなかない」ということを、先生に詰め寄ったことがございます。そうしたら先生は、しばらく考えて



「たとえばどういふことですか」とおっしゃるの  
で、具体的な例をお話ししました。「私の受け持ち  
の子どもたちに、みんなにお話をしてあげましょ  
う」と言うと、みんな喜んで砂を払って保育室へ集まる  
んですけれども、ある一人の子どもはいやだいやだ  
と言って逃げてしまふんです。すべり台のてっぺん  
まで逃げていってしまふ。だけど一人でほっておく  
わけにはいかないから、だっこしてくると、もう泣い  
てしまふ。だけど仕方がないから、だっこしながら  
他の子どもたちに話をしてあげる(の)ですけど」と  
申し上げたんです。すると先生は「その泣いた子は  
後であなたのお話を聞く時に、やっぱり泣いている  
のか、それとも聞いているのか」とおっしゃったの  
で「もう泣くことは忘れて、目を輝かして聞いてく  
れました」と申し上げたのです。「うん、それだ。  
そうやってくれば自発と同じだよ」とおっしゃって  
くださったんですね。この先生のお言葉をきいて、  
私はやっと安心しました。今までの長い間のなやみ  
がとけました。子どもたちから「先生、今度はおみ

こし作りましようよ」とか「時計屋さんをしまし  
うよ」ということを言ってくれることってほとん  
どないんですね。それでこちらが、子どもの興味  
のありそうなこと、あるいは発達に即しているんじや  
ないかというようなことを思いまして、子どもに提案  
すると、子どもはとびついてきますね。これでい  
いんだなと思って、それから安心してそういうやり  
方で、できるだけ子どもの興味のあるものを考えま  
して、子どもにのっけてもらって子どもと共にあり  
いのある楽しい生活をつづけてまいりました。

このような保育のやり方は、私だけではなく、附  
属幼稚園の皆さんが、いろいろテーマを考えてやっ  
ておりました。たとえば自動車というテーマでひと  
ときをすごしたこともございましたし、おもちゃ屋  
さん、魚屋さんなどは言うまでもございせんね。  
汽車という主題で、これは新庄よし子先生が長い間  
続けてなさいました。

ある時、参観におみえになった方に、こう言われ  
たことがございます。「こういう主題による教育は、



お茶の水のように手がたくさんある所、広い所、教材がある所でなくちゃできませんね。私の方じゃ、とうていできません」と。狭いお部屋に五十人も少し詰めになっている幼稚園でしたらあるいは主題による保育はむずかしいかもしれませんが、手がなくても私は充分やれると思います。教材でも、何もお金を使った物でなくても、包装紙でも新聞紙でも、廃物利用でできると思います。

私もがそういうテーマを中心にして子どもも先生も楽しそうにしている姿を、倉橋先生はいつも見ていて下さいました。そしてご自分でお考えになつて誘導保育という名をお付けになったのだと思います。保育活動を生活から誘導するという意味じゃないかと私は解釈しております。先程の坂元彦太郎先生のお話で、誘導という言葉が昭和十八年ぐらいで消えたということですが、誠に私は淋しいことだと思います。

現在の幼稚園でも、主題による保育をしていらっしゃる場所もございますけれども、幼稚園教育要

領が新しくできて、保育学校や保母養成所ができて、いろいろ教えるもんですから、そういうことに若い先生方はとらわれているんじゃないかというふうに私は考えています。幼稚園の先生はもつと、子どもの純真な姿や言動に、愛情や感動を持つて——と言うと教訓的になりますが、子どもの美しさにおどろきを持ち、楽しく余裕を持つて毎日をすごされたらいいんじゃないかななんて考えております。現在の若い先生方は一生懸命やっていらっしゃるんですけども、少しゆとりを持つて子どもの愛くるしさ、美しさを眺めながら、ゆつくりした気持ちで保育をなさったらどうかなんてことを、毎日若い方が懸命にやっていらっしゃるのをみて考えております。以上で私のつとめをはたさせていただきます。ありがとうございました。

\*ダルトン・プラン＝the Dalton Plan

一九二〇年代、米マサチューセッツ州ダルトン町で行なわれた教育指導法。ダルトン・プラン。



鈴木とく

私は昭和九年に、それまで大嫌いと言っていた先生と呼ばれるようになりました。今、坂元先生、菊池先生にうかがったその当時の幼稚園とは、全く何の関連もないようなことを、子どもたちといっしょにしていたことを、このような所でお話するのはお恥ずかしいような気がします。私が昭和十二年頃まわりました東京市の方面館託児所は、ほとんど底辺生活から浮かび上がれない生活の人たちでした。私が最初に参りました昭和九年の頃の東京帝国大学セツルメントのありました本所地域の生活者は、大きな工場とか市電の車掌さんとかの職業の方が多く住んでおりまして、方面館託児所の家庭よりは、ややましな暮しをしていました。しかしお母さんたちはみんな内職をしなければ生きていられないという家庭でした。

保育の新しい試みなどと言われましても、私は保育所のことは何も知りませんでしたから、「こうい

うことをしたらどうか」と思ってたことが、あとから理屈づけしますと、何か新しいことのようになっちゃった訳でございます。で、その原因は何かと言いますと、保母は三人で、用務員もなく、他に給食を作る方と、時々学生さんが手伝って下さるだけで八十人余りの子どもたちの保育をしましたので、何かから何まで三人でしなければなりませんでした。ですから、学校にあがるまでの子どもたちを、一応その当時の幼稚園がしているように、年齢で組分けをしていたわけでございます。それでは、一番小さい子ども(当時数え年三、四歳)を受け持つ先生は、どうにもしようがなかったんです。何か保育以前のセツルメントの用事でぬけてしましますと、二人だけで三組の保育をしなければならなくなり、そういうことが度重なりますと、このような組分けでいいのかしら、というわけで、窮余の策で考えたことが、少しは年長の子どもに手伝ってもらえることもあるのではないかしらということで、年齢混合組をつくっては、ということで、年齢混合組の保育



がはじまった、と私は思っております。

思いつきはそうでしたけれども、あとからつけましたもうひとつの理屈があります。

当時のセツルメント託児部というのは、教育学部の学生さんや、OBの方とか、当時託児部につとめておられた、現日福大の浦辺史さんとか、いろんな方たちがよってたかって私たちの保育のやり方へ批判を向けて、どうしてそういうことをするのか、とか、それはどういう意義があるんだとかとやつつけられますので、それに答弁しなければならぬという状況に置かれておりました。

まあ、もとはと言えば、私たちの人手不足からくる試みというつもりで、年齢混合のことを出しましたけれども、その方たちから、セツルメント託児部の方針として、初歩的な社会的集団生活の訓練ということが出ておりましたので、それを効果あるようにするには、この少ない保育たちでどうしたらよいのか、ということから、年齢のちがう集団の中で生活することがよいのではないかということを、

皆で話し合った末実践してみようということに決まりました。それからもうひとつは、親たちが忙しいので、ふつうの家庭に育つ子どもたちの、社会生活のうえで必要な良い習慣というものを、あまり身につけられていなかったものですから、もし子どもたちが世の中へ出た時に恥をかくことがあったら大変だなあと、私は心配しました。その頃、ちょうど栄養給食がはじまりましたので、食事の時にいろいろと食事の仕方とか、みんなでおいしくお弁当を食べるといふようなことを、どのようにしたらよいのかというようなことを、かね合わせまして、大きい子どもが小さい子どもになるような形を考えたらいんじゃないか、ということをやってみることにした訳でございます。また他に、親子ぐるみ、地域ぐるみで、子どもたちの生活向上をはかろう、子どもたちの育て方というものの向上についても、新しい組分けを通じてやれるのではないか、ということも話し合いの中に出されました。

当時の私たちの保育園は、横丁集団みたいなもの



でした。子どもは横丁や露地で遊んでいる時、大きい子ども小さい子ども、いっしょになつて遊びます。その間に、大きい子からいじめられますけれども、時にはやさしくいろんなことを教わったり、遊んでもらったりします。皆さん方にも、それぞれ遊んだ御経験があると思いますけれど、私はこの横丁での遊びを考えておりましたので、遊びの姿は、何も形式的に幼稚園のまねをする必要はないんじゃないかというような、若気のいたりとも申しましようか、反発心がありました。こうした組分けの保育をする間に、いつも話し合いになったのは、それじゃ年齢に合った、基本的なものや知的なものはどうするんだということでした。それはそれで、時々、同年齢であつめて、子どもたちに合ったような遊びをすればいいんじゃないかという提案をいたしました。ですから主体は、居住地域によつた年齢混合組で、同年齢に分かれた遊びは時々することでした。

こんど頂いたお手紙に、指導理論というものがあつたか、ということがありますが、だいたい保育

がどういふものかも知らないで保育になつたのですから、指導理論などというものは私自身には、何もなかったと言えます。託児部会の保育方針打合せで討議された方針が、指導理論と思います。

今、坂元先生がずっとお話になりました新しい教育運動というものは、私は、小学校、高等女学校、私が学んだ東京の学校で、それぞれ新しい教育運動について考えておられた先生に教わる中で、経験として思い出されます。

そうされて来たことが、何となく、子どもたちを保育する時に出て来たんじゃないかなあと思われます。身をもつて経験したことが間接的に新しい教育のおいとなつて高まつただろうと思います。

実践のおもしろさを言うようにとの御注文ですが、これもまた、あれで幼児教育なんだろうか、とお思ひになる方があるかもしれません。

朝、給食の献立がわかっていきますので、「今日は、何と何を買いくのよ」といいますと「ぼくも行く」、「私も行く」と言う子どもたちを十人位つれ出



して市場へ行って、観察もかねながら買出しして、持てる物は子どもたちが持つて帰ります。そうしますと、待ちうけていた子どもたちが、芋を洗う、今頃の季節でしたら、さやえんどうの芯をとるだとかして、運び役は給食室まで運び方をするなど、別に当番ということではなく、年齢なりにやりたい子が先生の手伝いをおもしろそうにするという風でした。他の子どもは、それぞれ好きなことをして遊んでいました。私が幼稚園でするいろいろなことを知らなくとも、とても面白く半日が過ぎてしまいました。保育五項目から言いましたら、これは何なんでしょう。うか。手技とも言えないし、観察だけでもございませんし。ですから本番で大人の生活に参加させると言ったほうがいいんじゃないかなあと思います。私たちが忙しげに庭やホールを掃除しているのを見つめますと、さっさと箒を持つて来て、下手ながら――ゴミを散らすようなものですが、手伝ってくれる子どもがあらわれます。塵取りにゴミを入れますと、さっさと捨てにいくれます。幼稚園で

子どもを手伝わせているのかなにかわかないと発表されたこともありますけれど、結構喜んでしている所を見ますと、あながち、こういうことも悪いことではないなあと感じておりました。私はその頃の上下関係というものに反発をもっておりまして、上の人に対して下の人は、だまっているか、頭を下げるか、ただ従う、そういう態度は何かおかしいんじゃないかなあということを思っておりました。だからいつもだまってハイハイと言っているんじゃないに、言いたいことを言えるような子どもにしたいなあという気持ちがございました。なるべく子どもたちが言うことは取りあげるようにしましたけれども、たとえば、机を出してその上で何かを作りなさいと言うと、そんなことをするのはさささいやそうに、ふくれてしまうのを、どうしたものかと考えこんでしまうこともありましたが、子どもたちの言い分を何となく退けてしまうこともあったんですね。

部屋がせまいので、いつも机の出し入れをしなければならなかったのですが、「そんなことやだよ」



という子どもに「だって困るじゃないの」と言いますと「そんなこと言ったって、先生困ったって、ぼくたち困らないよ」と言う子どもいます。そうすると、大人ですからうまいこと言いくるめて、それじゃ明日から順番にしようね、なんて言うのと、「順番は誰が先か」と言いかえます。きつと、その頃の幼稚園の先生方がお聞きになりましたら、やっぱり暮しむきのわるい所の子どもたちだとか、こまっしやくれた子どもじゃないかななどと感じになると思いますが、全然そうじゃないんですね。家にいる時と同じように、私たちにわがままを言える子どもというのを、私は考えていたんです。ですから自分が用意してゆかないで、子どもに話をしてくれと言われた時、「ちよつと、今日用意してこないからごめんね」と言うのと「なんだ、意地悪根性けつ magari」なんて、私にあくたいをつくんです。「いくらあやまっても許してくれないのね」って本気になって言いますと、「いいよいいよ」と許してくれるんです。先生と子どもというより、子どもたちのガキ大将と

いう気がします。またリーダーということが言われていまして、子どもたちの中からリーダーさんというのを決めました。結局私たちの代行をさせた訳ですが、並ぶ時だとか、何かを始める時に「今日のリーダーさん」と言うので得意になって、私たちより上手に子どもたちを集めたり、並べたりしちゃうんですね。どんなにふにやふにやしている子どもでも、リーダーをしたいと言うのでさせてみますと、何を言ってるかさっぱりわかりません。すると列の後の方から「もうちよつとしゃんとやれよ」とか「しっかりしろ」とか声をかけてくるんです。すると先生に言われるよりも、顔をあかくしながらでも、ちゃんとそこを切り抜けて行くというようなこともありました。

一番困りましたのは、保育室がないので、広い部屋一つで、三つの地域別グループが何をするにも、別々の所へ陣取ってしなければならなかったことにございます。そうしますと「○○グミはああいこうとしてるから、こつちでもそれをやろうよ」という



ことがでできます。そういう時には、ほんとに困りました。何とかこちらでしたいと思っていたことに子どもを引きつけながらやりましたが、自分のグループで飽き足らない子どもは、そつと抜けだして別のグループでちゃんと遊んでいます。しかし先生たち同志、これに何とも言わないようにしておりました。そういうこと以外、その当時はきつと困ったんでしょうけれど、今になってみれば、何も思い出せませんで楽しかったということしか覚えていないんです。

一番ユニークだったなと思うのは、一銭貯金というのをやったことです。これは何から始まったかといひますと、貧乏ぐらしをしていながら、子どもたちには毎日沢山の小遣いを持たせるんです。せがまれる度にやれば一日の額としては沢山になる。「一銭ちょうだい」「二銭ちょうだい」とせびる訳です。親はいくら内職しても間に合わないから先生から何か言ってくれというのです。私は思いつきで、少しがまんしてためて、自分の好きなものを買わせてみようという試みをした訳です。これには随分批判が

きました。まず学生さんたちから、自分のグループでだけそういうことをして、もし一銭持つて来れない子どもがあつたらどうするんだ。その子はその子でなくなつていいじゃないか、というのは私の考へでした。人のまねをする必要はない、人が一銭貯金したからつて、自分はしたくなければいけないでもないじゃないか、こういうのを子どもの中に育てたいなあと思つていたのです。手製の帳面を作つて、一銭持つて来ては、今日は自動車かいて、とか、ひよこ描いてとか言う子どもに、持つて来た印に略画をかいてあげたんです。何となく羨ましそうにして通りすぎる子があれば、この次ネと言つて、につこり笑うわけです。使つてしまわないで持つて来てためようかという気持ちになればよいと思つていた訳です。この話はきつと海先生に叱られるでしょうし、先生方にもおかしいんじゃないですか、と言われそうです。

何も画一にしないでよい、人がしているからとまねをしてする必要はない。そのことが子どもの気



持ちを傷めつける形にならないうちに、先生の方でそれにかわる何かを心がけるということを、保育の中で考えたらいんじゃないかという考え方だった訳です。

地域別年齢混合保育でもつといろいろございますけれども、この辺で――。(練馬高等保母学院)

※現日福大Ⅱ「現、日本福祉大学」の意。

## 海 卓子

私は昭和二年に土川五郎先生〔律動遊戯〕の創始者〕が、はじめて保育科をお作りになった、その第一回生です。そして、そこで倉橋先生の講義も週四時間うかがいました。それまでは女学校におりましたが、つまらない学校だったのです。五年生の時、偉い先生が修身をやって下さったのですが、女とは何か、人生とは何かを語るのかと思ったら、「良家の子女は……云々」などとおっしゃる。私、良家の

子女かしらと考えました。ばかばかしくて聞いてられない。これが教育かな? と思った。ところが倉橋先生のお話を聞いたら、また教育とは何とすばらしいものかと思いました。どんなふうにすばらしいかと言いますと、まず倉橋先生は「自然と一致することは、子どもの榮譽である」――これはスタンレー・ホールの言葉だそうですね――「子どもと一致することは教育者の榮譽である」と。自然と一つになるというのは芸術の心ですね。雑念の入った芸術なんてございませぬね。「あれ? 教育は芸術じゃないか」と思ったのです。教師が子どもと一致するためには、教師が自然と一つにならなければならないということですね。

幸いなことに、私は田舎育ち。だから自然が大好きなのです。兄弟がいらないから、子どもが大好きだったのね。あつ、もしかしたらなれるかもしれないなと思ったのです。それで先生のお話に我を忘れて聞きほれたのです。

さて、昭和三年に市立幼稚園に勤めました。そう



したらまた、おったまげちゃった……。その前、学生のお茶の水でどんなことをやっているか見学に行きました。子どもは、三々五々自由に遊んでいます。花壇のそばで、部屋のすみで、またどこかによりかかってお友だちとおしゃべりしている子もいました。少したったらピアノがなって、どこからともなく子どもが集まって来るんです。まるで手品みたいに。「いけません」なんて言う先生はいなくて、みんなで体でおどっているんです。それで「いつも集めになるんですか」と聞いたら「こはんの時です」。それでまたびっくりしたのです。こういう楽園もあるのだと。

昭和三年に幼稚園に勤めましたら、なんと机と椅子がくっついていのです。歌はどういうのかという「奈良の、奈良の、大仏さんに、スズメが三羽とまって、なんとって鳴いてます。チュンチュンチュン、チュンチュン」。この歌にどれだけ共感するのでしょうか。へーと思ったわけね。ところが主任保母は四十いくつのおばあちゃん。おばあちゃん

んといったら悪いかな、私なんか、大おばあちゃんになっちゃう。この先生がいる限り何もできないなあど、正直なところ思いました。今、若い先生が私のことをそう思っているかもしれません。

その頃東京市は、日本橋、京橋から幼稚園が小学校に付設されました。子どもがいなくなったから空教室を幼稚園にしようというわけです。これは幼稚園教育の普及と思ったら、ちよつと違ふのね。そこで、先輩はみんな新設園の主任保母として出ていく。その結果私は、二十四歳で主任保母ということになりました。その他に二十二歳と二十歳の保母で、これじゃ経験がないから、いやでも話し合わなければなりませんね。三人が頭を寄せて知恵を出し合つて、気が向けば八時まで仕事をする。一方「今日、いい映画きているのよ。見にいきましょう」と二時頃帰ってしまう。

保育の仕方は、倉橋先生にうかがった自由保育だったんです。まず、畳の部屋の改造でした。付きそいが待っている部屋です。そこを「ままごと」の



部屋にする。また、若い二十歳代なのに「じいや」「ばあや」と呼ばれる小使さんが、蜜柑の空箱で机や茶箆などを作ってくれた。年長の子どもが果物のアップリケのカーテンを作り、年中組の子どもは絵を描いてかざるのですね。いわゆる縦割り保育です。三歳児から五歳児まで、そこでたまって遊ぶのです。そうしましたら不思議なことに、ジャングルジムに登って四歳の子どもが何とつぶやいたと思いますか？ 「奥さん、メートル調べです。お宅随分使いましたね」と。生活遊びですね。その前の保育は、百年史スライドで御覧になった明治時代のあの恩物ですよ。折紙、織紙、組紙、箸並べ、板並べ、環並べ、というのね。それをやっていたのです。私が勤めて四年目ですから、昭和七年からはじめて自由保育に変わったのです。

ところが問題も出てきました。ボスができてしまったのです。その幼稚園は屋敷町と商店街の谷間で両方の子どもが来ている。だから町の子と、おぼっちゃんお嬢ちゃんがいる。それでそのあばれっ子に

誰もノーと言えなくて、大ボスにのしあがってしまいました。一昨年でしたか幼稚園の同窓会を開いた時に、五十歳位のオヤジさんが「先生はいつもあのおっかない鼻たらした、あの何と言ったっけなあ、あの男の子について歩いていましたね」と言っていました。その子の名前は忘れません。わきおちゃんというんです。その子にはさすがに手を焼きましたね。どうして良いかわからない。これが私の悩み始めですね。

始めはいろいろな講演会に聞きに行ったり、本を読んだりしていたんです。たまたま昭和十年ごろ、保育問題研究会ができて、城戸幡太郎先生が会長で、山下先生とか、今の元老格の先生方が三十歳そこそこでしたね。それぞれの専門分野の方が集まって、ざっくばらんに物が言えた訳です。

その頃の公立幼稚園というと、園長が被布を着ていらつしゃって、静々とお出ましになると、主任がパツとぞうりを揃える。ちよつとモタモタすると「何しているのよ」と怒鳴られた。権威者だったので



す。そういう会合でうっかり発言すると「あんたの所の若い人変なこと言ってたわよ。気をつけなさい」と叱られてしまう。公立の幼稚園がその頃まだ明治時代の保育をしていたということは、職員集団が縦の人間関係で自由に話せなかったということです。だからいくら倉橋先生が名講演をなさいしても、それはその場だけの話で浸透していかない。公立幼稚園に浸透したのは昭和七年。ところが、昭和六年には満州事変がおきています。昭和十二年には日支事変に発展しているんですね。昭和七年から五か年位が「自由保育花盛り」ということになりました。うか。それから戦争の方に傾斜していくのですね。

私は昭和十七年までおりましたけれども、もう昭和十年位になりますと、戦争色が出て来ました。子ども遊びも、兵隊さんごっこ、看護婦さんごっこに変わってくるわけですね。しかも小学校に付設の場合は、朝礼も一緒にする。幼稚園の子がわざわざわと騒ぐと、見学している親が非国民だと校長に言いつける。「幼稚園の子どもがさわいでいても、先生

は何も言わない。あの先生は非国民だ」というわけです。「自由保育」どころではありません。大正六年に倉橋先生が「会集はおかしいからやめましょう」と言って廃止しました。「大人っていうのはどうして子どもを自分の身の回りに集めるのが好きなんだろうね。子どもが集まってくる所へ、大人が足を運びなさい。そうすれば、何かつぶやいている。水溜りがあれば足でパチャンと蹴る。石をポチャンと入れる。のぞくと、影が映る。そういうことがあるもんですよ。それを子どもといっしょに楽しみ、そこから保育が始まるのです」とおっしゃった。それが、いつの間にか国家目標による保育に切りかえられつつあったのですね。

そのように大正時代の自由保育は、非常に時間が短かったのです。戦後の新教育が誕生した時、大正時代に一生懸命に自由主義保育あるいは自由主義教育をなさった方が、それをもう一度思い出してやっていた時、CIEの<sup>\*\*\*</sup>人が公開保育を見に来て「あなたは誰に教わったんですか」と言いました。研究授業を



した女の先生は「私は大正時代に教わりました」と言われました。当時、プロジェクト・メソッドとかドルトン・プランとかいって、講習や研究会が行なわれたのです。いわゆるプロジェクト・メソッドというのは、幼稚園で言えば、ごっこ遊び、誘導保育と言われるものですね。つまり大正の自由主義保育というものが、ほんの短い期間で浸透するかしらないうちに、回れ右しちゃったのです。全国的には本当に浸透しないうちに、国家目的の下に全体主義的教育に巻き込まれてしまったのです。

今現在、私が大変気になっていることがあります。というのは、大正、昭和の始めには、子どもたちの意見が対立しますね。たとえばある子どもが「仏様の方が偉いんだよ、おまえ」と言うと、ある子どもが「違うよ、天皇陛下の方が偉いんだよ。うちのお父ちゃんが言ってたもん」。そうすると、仏様の方が偉いといった子どもの方が、「うちのおばあちゃんが言ってたもん」と言うんですね。終戦後、昭和二十二年にうちの幼稚園が始まっていますが、

それからまあ二十七、八年位までは、おじいちゃん、おばあちゃんという言葉が出ました。その後何になつたろう？ 「パパが、ママが」です。今は誰が出るのだろうか。「あら、よく知ってるね、だれに教えてもらったの」「テレビで見たもん」。ひどいになると「図鑑に書いてあったもん」と言って、お父さん、お母さんが出て来ない。おじいちゃん、おばあちゃんはもちろんとうに消えてしまっている。それは何なのでしょう。

それからもう一つは、たとえばモンテッソーリ教育とか、ピアジェとか、いろいろな教育論が出ておられますね。ところがそれは、大正自由主義の時に一べん否定されたものです。否定されてもいいのです。良い所があるので、その良い所をもう一度いただくのはよろしい。けれど日本人は一辺倒なのです。ああ、モンテッソーリ、モンテッソーリ、ああ、ピアジェ、ピアジェとなるのね。子どもの実態を見てほしい。もう一度倉橋先生にご登場願って「子どもとは、本当はなんだろう、何を感じているのか。



今ぶつぶつと言ったのはどういう意味なのか」と。

鈴木先生がおっしゃいましたね。「先生と子どもじゃない。家にいる素顔が保育所で出ているんだ」ということ。素顔が出せる環境というのは健康なんです。今の幼稚園の子どもが、保育所の子どもが、本当に素顔を出しているかということです。素顔を出せる環境がないですね。広い庭がないでしよ、草がない、泥もない、水も使えないでしよ、虫もいないし、葉っぱも落ちていない。これで何で素顔が出せるんですか。大人の労働が子どもの目の前から消えた。子どもも手や足を使わなくなった。ないないづくしの保育をどうするかということが、今後の大きな課題ではないでしょうか。

(白金幼稚園)

\*\*\* CIE 民間情報教育局 (連合国総司令部幕僚部の部

局の一つ)

\* ドルトン・プラン II p. 20 参照。

(『幼児の教育』第七十五卷第十一号より)



### ◆ 保育を伝え、保育を再構成する

実践者三人の話を受けて、ここでは、おしゃべり、談話、話し合いなどによる保育を再構成する「語り」について考えてみたいと思います。

その場に居なかった人にも「保育の場で起こったこと」をわかりやすく伝えることが、今、保育実践者には求められています。保育を伝えるための語りは、保育をした人がその時のことを思い出し、起こったことの意味を探りながら場面を再構成しつつ生成されるものです。これは、現在アカウンタビリティ(説明責任)と呼ばれ、保育の専門性として注目を集めていることでもあります。その場に居なかった保護者、保育者、研究者に、保育中の出来事の説明を通して子どもの姿や実践者の思いを伝え、次の保育の見通しについて一緒に考えていく素地をつくることは、多くの保育の場で日々行われています。

ここで考えておきたいことは、保育場面を臨場感をもって語るといふ保育を再現する試みが、先の三



氏の語りからも明らかなように、実践者本人のものの見方を色濃く反映する、思想を伴う営みであるということなのです。価値中立的に保育が再構成されるということはあり得ません。実践者本人の身体を通じて、実践者に咀嚼された保育実践のみが「起こったこと」として構成され、伝えられるからです。そうであればこそ、本人による保育の再構成、つまりそれは記憶の呼び起こし作業ですが、それが思い込みに偏ることがないようにしていくことは、保育を実際に構成していく上でも重要なことでしょう。

小学校以上の授業研究でも、いかに授業を再現するかが問われています。たとえば教育学者の佐藤学氏が注目するのは、研究授業の際、授業の発話を録音できていなかったという不測の事態に対し、参観していた教師の一人が「じゃあ、僕が作るわ」と事なげに言って、132にのぼる授業の発言をすべて再現してみせるような、子どものわずかなつばやきも逃さず再現する実践者の聴き方です。<sup>注4</sup>なぜ初めて出会った子どもたちの授業中の言葉を、一字一句もら

さず記憶することができのでしょうか。

その秘密は、子どもの発言を一つひとつは偶然でも、同時に必然でもあるととらえる聴き方にあると佐藤氏は言います。どの発言も、授業の題材、他の子どもの発言、その子自身のそれ以前の考えや発言とつながっており、そうした織物のような言葉の前後関係を認識できていればこそ、子どもの発言を正確に思い出し、子どもたちによって編まれた授業を再現することができるのだと指摘しています。

保育の場面を語り、保育実践を再現することは、教室の授業以上に子どもの動きが予測しづらいことを考えると、より難しいことなのかもしれません。学校の授業実践以上に、保育実践の場面では、再構成の仕方や内容が問われているように思われます。

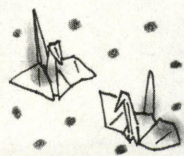
### ◆実践の再構成である記録

ところで、保育の再構成には語りだけではなく、記録という方法も当然あります。そもそも実践記録が、教師の内省的反省の中で誕生してきたことにつ



いては、浅井幸子氏の詳細な研究ですでに明らかにされています。<sup>注5</sup>ただそれから半世紀たった一九六〇年代のお茶の水女子大学附属幼稚園の実践記録を見てみると、記録にはより公的な意味が付与され、保育カリキュラム編成のための欠くことのできない資料となっているように思われます。

以下、三歳、四歳、五歳、それぞれの一年を振り返ったお茶の水女子大学附属幼稚園の実践記録を再録します。学年別、クラス別の個別具体的な保育カリキュラムが、幼稚園教育要領との往復作業をしながら形づくられてきたことがよくわかるのではないのでしょうか。各クラスの担任によって書かれる実践記録には、年齢はもちろん、それぞれの時期・季節に即した子どもの育ちへの配慮があり、保育目標もそれに合わせて設定されていく幼稚園保育の丁寧さが伝わってきます。



一九六四年『幼児の教育』より

### 三才児の生活

村石京子

新幼稚園教育要領の第三章1の(5)に次の項がある。「入園当初においては、教師は個々の幼児に特に細かな心づかいをもって接し、できるだけ早く教師や他の幼児に親しませ、喜んで登園するように導き、幼稚園における生活に慣れさせ、安定した気持ちで幼稚園生活を楽しむことができるようにすること」

ここをよむと実に三才児の保育について、教師のもつべき保育の中心的ねらいがみごとにでていると思う。昨年一年間、三才児と一しよに生活してきたが、その年間の目標とし、毎学期の目標としたことが全くそのまま新しい教育要領の中のこの一節に当るのであった。ただ三才児の場合に年令を限って考



えるならば、「入園当初においては」という表現が「三才児においては」とかわってくるのは当然であるし、また「できるだけ早く」ということばを（一）の中に入れてしまいたいという気持がある。

何故なら教師の側の希望としては三才児であつても勿論一日も早く幼稚園の生活になれ、友だちや教師と親しみ、幼稚園の生活を楽しくむようになつてほしいとねがうのであるけれど、三才児の実態はあまりに幼なく、そして個人差が大きいことに氣づくと、できるだけ早くこうした状態になつてほしいと念じながらも、一方では決してあせつてはならないと反省をくりかえすからであつた。

そのため三才児の初期から順調にこの目標に沿つてすべりだした者もあれば、なかなか方向の定まらない者もあつたけれど、とにかく年間の目標として三月までには級の全ての幼児が、安定した氣持で幼稚園生活をじゅうぶん楽しむまでに成長できるように、教師も幼児も一しよに努力していこうと目指したのである。

## ○一学期

「できるだけ家庭的ふんいきで」

三年保育の級は十五名であり、この級は男児七名、女児八名で一学級を編成していた。その中は四月生まれから三月生まれまでにわたっている。満三才頃の年齢において生まれ月による差のあることは当然として考えられる。同じ一級の中で生活しているけれど、一方の幼児はついでこの間満三才の誕生日を迎えたばかりであり、一方ではもうじき四つになるという子どもである。教師はこの生まれ月による差をよく考慮しなければならない。また一面、子どもの発育はその発達がある方向にかなり速いものをもつ子どもと、比較的ゆっくりだが充実している者など個人差も大きい。更に発達のものだけでなく、性格によつても非常に生活の上の形に現われるものが異なってくる。進取の氣性に富んでいる者と、引っ込み思案の性格とでは同じ内容をもつていても、ずいぶんと現われたものは違っている。さまざまのこ



とを考え合わせると、わずか十五名の級であるけれど、個々の幼児に特に細かな心づかいをもつて接する、という気持をきわめるには決して少ない人数ではなく、むしろ手一ぱいという感じさえしてくるのであった。

この子ども達に共通なことはこの四月から幼稚園という新しい社会集団、それは家族集団とは別の意味をもつ集団のメンバーになったという点である。

子どもが新しい集団の中に抵抗なく入るために、できるだけこの新しい集団のふんいきを家族集団に近いものにしたいたのぞんだ。子ども達には気やすく緊張なく入ってもらいたいという気持のもとに、今まで家でしていたと同じように自由にふるまい、何でもしたいことを好きにやってあそべるということをも身体で感じとってもらえるようにした。おもちゃも個人的なものを揃え、そして数も比較的豊かに揃えた。また父母にも、幼稚園に行ったらこうこうしなさいというようなよい子の規約を子どもにも与えないでほしいということを話し、あるがままの姿を見

せてもらえるようにしていった。

このような配慮のもとに一学期をふみ出したが、やはり一学期はさまざまのことがあった。男児ではかなり攻撃的で落ちつきのないAや、心配性でうまくみなの中に入れずそのいらだちが自分の思いとは逆にじつとうずくまってしまったり、あるときは暴れてしまったりするBに特に手がかかった。女兒はわりあい集団生活にすつと入れたがやはりちよつとしたことで不安定になって泣く者が二、三名あったが、中でもC子は今にこにこして遊び出せたと思うともう次の瞬間には大きな声をはりあげて泣き出すことがたびたびであった。また、はじめの頃順調に園生活の一步をふみ出したように見られたD子は、おもちゃをとりあうと絶対にゆずらずにその剛情さに目を見はる思いをする折もある程であった。ちよつと目をはなすと泣き出すC子に片手をあずけながら、おもちゃで元氣にあそび出した数名にはつとずする間もなく、Aはせっかく他の子どもがつくつた積木を体あたりでくずしてしまいたちまちけんか





▲アブクたった（当時の誌面から）

にええ（当時の誌面から）  
識が少しづつみられる  
ようになつた。教師が  
仲立ちをすれば、かご  
めかごめとか、あぶく  
たつたといった集団あ  
そびが喜ばれるようになつたのもこの頃である。

保育内容の面では  
一学期は幼稚園の生活

が始まる。やっとなだめた時、今度はままことの場でD子が他の女児の使っていた人形を強引にとろうとする。片方ははなすまいとし、D子は無理にとろうとしてとうとう相手の子どもの洋服にむしやぶりつき相手は泣き出す。こんなことのくり返しも最初の数週にはよく起つたが、はじめは短かつた保育時間も順次のばして通常の保育時間に落ちついた頃から、友だち関係も次第につながりができて、一しよ

にあそびたいという意

になじむことと、必要な生活習慣を身につけることが中心であるから、自由あそびが殆んどいってもよい程でその間に一しよにうたをうたつたり、好きにえをかいいたり、はさみのあつかいになれたりすることなどを行なつていった。

## ○二学期

「いろいろな経験をする」

二学期は幼稚園や社会の行事が三才児の保育内容の中にもたくさんもられていった。運動会、遠足、芋ほり、クリスマス、お正月を迎える、等々。これらを六領域におりこんだ活動をし、更にその他にも経験内容を豊かにしたいと心を配った。例えば一学期にはあまりあつかわなかつた描画や製作の新しい材料も少しづつ入れていったりもした。

日の経つのも早いけれど、子どもの成長も加速度である。この学期の出だしにも、長い夏休みのあとで多少幼稚園での習慣や心の安定がくずれた時期もあったけれど、これは一学期のように白紙から染



めていくのではないのでできていくのも早かった。しかし困ったこともあった。一頃おさまっていた子どもの泣きぐせがこの学期の中頃からはじまって、いろいろ手をつくしたけれど結局冬まで持ち越してしまったことである。(これは三学期の始まりを契機としておさまることができたが。)このことをのぞけば級の生活は軌道にのり、破壊活動やトラブルは見違えるようにへったので、のびやかにそして落ちついた生活をもてるようになった。

### ○三学期

「みんなで仲よく」

三学期は、間に入園検定のため園児は休みの日があったりして暦の上よりも登園日は少ないけれど、やはり実質としては最も充実を得、まとまりをもった学期であったといえよう。この時期の子どもの成長をみると、それ以前は遊ぶにしても教師や友だちに誘われるから遊ぶとか、遊具や玩具がそなわっているから遊び出すというような、なかば他からの働

きかけによって動き出す場面も多かったが、この頃になって全体に積極性がまし、あそび方やおもちゃの扱い方も一通りから一歩でて、いろいろ工夫があつておもしろくなってきた。この頃以前と比べて目立って進んだ点は次のようなことである。(これは勿論、三才児の程度としてである。)

●あそびに目的をもっている。

●自発的にあそびに参加できる。

●あそびの役割をはたす。

●あそんだあとの始末がすんでできる。

また友だち関係にも巾が出て来てグループであそぶことが多くなり、いわゆるごっこあそびが盛んになってきた。例をとってみると、幼稚園ごっこ・お店やごっこ・パトロールごっこ・高速道路線の建設・動物園ごっこ・アトムごっこなどのあそびがくり返し行なわれ、次第にそのあそび方も複雑になっていった。またこの学期には、教師の側からの働きかけで劇あそびの簡単なものをやつてあそんだこともある。



ごっこあそびの盛になったことの原因は、友だちあそびが活潑になったことと、大ぜいのグループ（級全員であそぶという形もよくとられたが）のあそびがおもしろくなってきたことにあるといえよう。そしてはじめはみながばらばらであつたのが、友だちとあそぶ楽しさを知り、それをより楽しく続けるために、個人個人が社会性を伸ばし協調性を高めることの大切さを自然と身につけていったことも大きな要素となつたと考えられる。

\* \* \*

三学期はみんなであそぶ楽しさを心から味わつた。しかし学期末にかぜなどで欠席の子どもがぼつぼつと齒がぬけたようにいると、子どもの側から友だちを待つ気持が強くなってくる。そのような折に来年度はもっと友だちが多くなることを話すと、そうしたら今までよりもっと大ぜいであそぼうと期待し、新しく入る友だちと一しよに始まる四月の新学期を楽しみに待つ心が日に日に育つのであつた。

## 四才児の友だち関係とごっこあそび

関 治子

四才児の一年間の生活を通して、教師の意図と、幼児の活動の実際をとりあげ、再考してみたいと思う。

三才児として一年間幼稚園生活を送つた十五名に、新入の二十名を加えた三十五名の組である。何日かたつ間に、幼児期の特徴とはいふものの、自己主張の多い、自己中心性の強い幼児が多いことを感じた。そこで、

四才児の組の指導目標

○幼稚園生活を楽しむ

○生活習慣を身につける

○友だちと協力してあそぶ

○創意ある表現をする

更にこの組としての指導目標



○友だち関係（教師との関係も入る）と幼稚園生活（社会生活）を円滑に進めていく

このような点を強調して指導していく必要があると考えた。

## 友だち関係

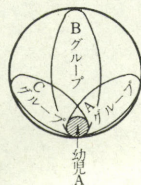
四才児の組の四月に、よく経験することであるが、新入の幼児の方が、何人かの例外を除いては、緊張しながらも、楽しくあそびはじめ、三才からいる方が、何か不安定な状態がみられたりする。三日目位になると、あそびに調子が出てくるが、新入の方が、興奮状態なのか、遊具をどんどん移動したり、乱暴に扱ったり、あそびの持続時間も短く、前からの幼児の方も、それにひきつられるありさまで、何とも落ちつかない。あそびらしいあそびも発展しない。一週間位すると、前からの幼児同志がグループになってあそびはじめた。こちららも、つとめて集団あそびなどで、いろいろな友だちと共にあそぶ経験を入れていく。だんだんに各種の遊具への興味を示

し、あそび方も工夫するようになってきた。

こうしていくうちに、友だち関係が固定しかけてきたが、その間にも、衝突があつたり、泣いたり慰め合い、仲なおりましたりというように、変っていることがある。

友だち関係をみてみると、登園直後に一しよにあそぶ友だちと、暫くたってから一しよにあそぶ友だちというように変る場合、また一つには、あそびの種類によつてAグループとあそんだ後、Bグループと一しよにあそぶ場合とがある。つまり、A図のように、組全員の中に、何人かよくあそぶ友だちが大体きまつていて、その中で時と場合によつてAグループ、Bグループをなすという傾向にあるようだ。

中には、はつきり三人だけのグループに固定している場合もある。また、一人ぼっんとして積極的にあそびに入らず、皆の動きをみている幼児Bにも、



▲A図（当時誌面の図版）



やはりA図の動きがあることが確かめられた。

一学期の間は、この動きがはげしかった。人数も二人から四、五人というところで、多い時には、二種類の平行したあそびで、九人ということもあった。

二学期三学期の間に、あそぶ友だちのすつかり変った幼児もあるが、あそぶ友だちの顔ぶれが決っている幼児もあり、三学期の終り頃は、割合はつきりきまっていたと思われる。

友だちの関係は、ある程度、安定感をもっていることが必要だが、余り特定の人にだけ固定してしまふのは、よくいつている場合はよいが、独占、排他、主従関係におちいつてしまう場合も考えられるので、A図のようになっていくことが望ましいのではないかと考えている。

次に、これは幼稚園であらわれた性格を含めての友だち関係の特徴を捉えた例として挙げてみることにする。

一学期の終りに、母親たちと、幼児についての話

し合いの機会を持った。幼児同志が、よく一しよにあそぶということではなくて、話題や問題の共通と思われる数人ずつを、私が選んだ。

Aグループ。小学生の兄弟をもつ末子ばかりで、友だち関係がスムーズにすべり出さない。自己中心になることはないが、意志が強固で、やたらな妥協をしない。

Bグループ。長子の男児ばかり、何れも一、二才の弟妹がいる。一人ひとり、気持はやさしいのであるが、幼稚園という社会集団の中では自己中心的、時には攻撃的で、なかなか自己というものの調節がとれない。

Cグループ。長子の女児ばかり、何れも一才から三才の弟妹がいる。大体自立心が強く、身のまわりのことや約束などはよくわかり、友だち関係も、比較的スムーズにいく。

Dグループ。環境は異なる、陽気だが、はにかみが強く、不和雷同型、しかし、グループ意識は強い。

Eグループ。女児ばかり、何れもまた友だち関係



が不安定、性格は異なる。

Fグループ。男児ばかり、素直で友だち関係も抵抗感がないが、強いものにおされ易い。

D、E、Fは二期三期三期と経ていくうちに、大分特徴や、性格のあらわれ方に変化があつたが、A、B、Cは、兄弟関係という環境からくる共通のものがあるのだとしたら、と考えさせられてしまった。

## 幼児のごっこあそび

次に、この一年間の幼児の活動の中から、四才児としてのごっこあそびの実態を実例にそつて二、三記してみよう。

### 1. 運動会ごっこ

春に、小運動会を経験した。友だち、母親と共に、ゆうぎ、競技をしてあそぶ。次に、いろいろな領域で、これを再現する。展開してあそぶことを考えた。たまいの場面を、皆で、赤白の球をつくつて、壁面の網の中にはりつけたり、人物をはりつけ

たりする。音楽リズムの面で、運動会ごっこから、オリンピックごっこと称して、開会式、水泳競技、陸上競技などのまねをしてあそぶ。体操やダンスを、創作（勿論初歩のもの）をして、やってみて、皆にまねをしてみよう。また、リレーに似た競技をしてあそぶ。これらは、大体一学期のことである。

### 2. 電話ごっこ

日常、ままごとやのりものあそびは、電話を使う場面がよくみられる。電話のみならず、組木で無線のマイクを作つて、話をしたり、こういう会話は、あそびの上でも重要な役割を果たしている。二学期に、電話ごっここのうたを覚え、それから歌詞をかえて、「たろう」というところを、この組の幼児の名を入れて「はいはい、私はひでとです!」。次に「ままごとあそびをいたしましう」のところを「エイトマンあそびを……」。こうして、皆と一しうにうたうことをしてみた。だんだんに、この歌から離れて、自分のなりたい人物になって、電話で話を



した。はじめのうちは、私が、助けて、三人の会話のように中継していたこともあったが、時間をかけていくうちに、口数の少ないD子が、母親になりきって、「今、お洋服をぬつているところですよ」。

「誰のですか」。「ママのです」。などと話し出すと、ほほ笑ましい。口の達者なE夫は、「こちらは〇〇会社の人事課です。あ、ちがいました。庶務です。今度庶務になったんだ。はい、今、ちょっと忙がいんですけど」。F夫は、「今、ロケットに食糧をつみこんで発射します」。こんな調子の話がつづく。G子は、「おかし屋さんですか。これからお誕生会をしますから、ケーキをもってきて下さい」。また、お当番になった人が、マイクを使う感じで、皆に伝言したりというようにしてあそんだ。

### 3. お店やさんごっこ

組全員が、さく画からぬけ出して、絵をかくことが、大分はやって好きになってきたのが、二期の半ばすぎ、そこで、二期期末に絵によってあそべる

「絵合わせ」をつくった。説明や、紙を切ることなどは教師がして、あと、わかるような絵をかくのであるが、これは、要領がわかると何でもないので、兎なら兎を紙一ぱいにかくということが、なかなか四才児にはできにくい。そんな場合には、一枚の紙に兎を二つでも三つでも、余白のないようにとことばをはさむ。こんな経験を経て、目的をもった製作や話し合いを、三学期に「お店やさんごっこ」として計画した。ままごころからお店やさんがよくみられる。中でも、絵本のうりかいあそびなどさかんで、うりかいの興味も大いにあるところである。

幼児の製作物（うるもの）が相当数必要で、いろいろとつくらねばならないが、興味の持続も考え合わせ、三学期はじめには、お店やさんごっことして幼児に話すことはさし控えた。そして、ぼちぼち製作物を揃えていった。

一ヶ月たった二月八日、室内あそびの多い時機で、おかしや、パンやなどお店ごっこも多い。でき上った製作物を示して、「お店やさんごっこ」の相



談をもちかける。皆、目の色を輝かして相談にのつてくる。皆の考えたお店は、おもちゃや、おかしや、本屋、果物や、酒屋、花屋、おそばや、かばんや、お人形や、デパート、自動車や、お魚や、である。今、うるものができているのは、お人形や、かばんや、本屋、あとはおかしやと花屋かくだものやということになった。次の日になって、「先生、私、おかしやと花屋がいいと思うわ。考えてみたんだけど」といって一生懸命の日子もいた。その後、相談しながら製作をつづけていったが、二月中旬に一週間のブランクがあった。（入試のため休園）ひな人形つくりから、こけし、壁かけ人形、指人形と、お人形やの材料も数がふえてきた。

三月四日、いよいよ十三日に開店して、他の組の方に買いにきて頂くことになった。皆も、はりきっている。三月十二日、売る人をきめる。希望のお店をきめるが、多いところは話し合いで少ないところに行く。お店のかざりつけ、ねだん表づくり、招待状を出す、おつり銭づくり、などがこの日の仕事

だった。

三月十三日、お店やさん開店

お人形やさん（人形、動物、ロボットなど）

・おすもう、こけし、つり人形、赤ちゃん人形、指人形、手足のうごく人形

かざり人形

（材料は紙・布・牛乳のふた紙・モールなど）

かばんやさん

おさいふ、バスケット、ハンドバッグ、かばん

（材料は紙・箱など）

本屋さん

絵本（「物語―親指姫・三匹の子豚」「エイトマン」

「ようちえん」など）何れも字はなく、表紙だけ字をかけたものもある。

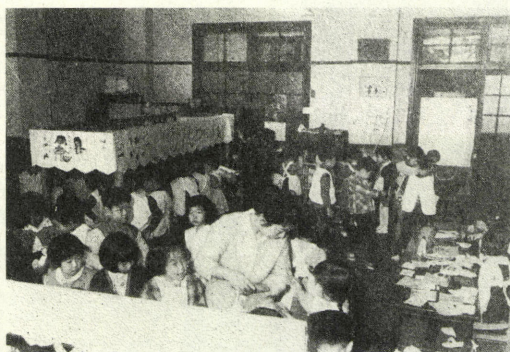
おかしやさん

キャラメル、あめ、チョコレート、ビスケット

（材料はタバコの空箱・牛乳のふたとふた紙・スポンジ・段ボール・クレラップ・銀紙など）

登園した幼児から、売るものだから大切に扱うと





▲お店やさんに買いに来ていただく（当時の誌面から）

いうことで、組の中で、自由に売買してあそぶ。い  
ささか、興奮気味だが、活潑に大喜びであそび、つ  
り銭を配分したり、おもしろそうにあそんだ。その  
後、お店も整理して、いよいよ、交代制でお店の人  
になることにして、買いにきて頂く。声をからして

「いらつしやい！

いらつしやい！」

と大さわぎ。そ

うかと思うと、

だまって、そつ

と、売るものを

さし出す幼児も

いる。興奮のさ

めやらぬまま、

四、五十分であ

らかた売りつく

して、お店やさ

んはとじられた。

残品を二点ずつ

組の中で買ったが、自分個人のものという概念が  
すっかり外れたのか、自己主張もなく、静かに選ん  
でいた。組全体の一つの目的である活動に、それぞ  
れの気持が向いたように思う。興味の程度に個人差  
はあるが、協力してつくるとか、かわるがわる売り  
手になるなど、多面的な活動で、作品としては、そ  
れなりにつたないものだが、四才児としての協力と  
いうことを身につけるには、無理なく入れるよい機  
会であった。興奮をどのように処理するかは、教師  
の問題として反省している。

四才児のごっこあそびは、一年間に、随分変化  
し、成長していくものである。勿論発達段階とは思  
うが、教師が、はじめは中心になったり、或いはかじ  
をとったり、助言や補佐にまわったり、見守るなど、  
幼児の活動をよくみて教師としての行動を判断する  
ことも必要と痛感する。一年終った現在、個人差は  
あるが、四才児として活発な活動がみられるようにな  
ったことは嬉しく思われる。



## 五才児の一年間

守永英子

最年長の組といっても、四月頃の日誌を開いてみると、“こんなだったのかしら”と思うような記録が残っている。“四月十五日、身体測定……M夫がひとりで衣服をぬぎ着しようとする気持をみせてきた。”四月二十日、友だちとの遊びにあまり積極的でなかったH夫が、他の六人の男児に加わって元気に大きな砂山を作ったり、トンネルを掘ったりした。“このような小さなことがらがその頃の私の毎日の喜びだったに違いない。”

これらの子どもたちに、このような人になってほしい、このようなことを身につけてもらいたいというねがい（目的、或いは目標ともいえる）はいろいろあった。しかし、それらの中で何か一つ二つあげるとすれば、自主および自律の精神と、協同の精神

の芽ばえをつちかっけておきたいということかもしれない。

四月の末、最年長組になって初めての共同製作として、“鯉のぼり”をとりあげてみた。共同製作といっても、この時期ではごく淡いもので、初めから子どもたちがその意識で計画的にすることはできない。先ず、昨春秋、運動会の絵を二人ずつでいた経験を一歩進めたような形で行なうことにした。ちょうど自由遊びの時にS夫が鯉のぼりを作ったのを機会に、“もっと大きい鯉を作らない？”「紙が大きいから、お友だちといっしょに作ったらどうかしら」というような誘導をした。先ず、K夫、S夫、Y夫がいっしょにひ鯉をつくり、そのうちS夫がまた吹流しを作り始めた。この三人と親しいM夫が「僕もする」と加わったので「今、お母さん鯉ができただけ、あと何を作るといいかしら？」と言うと、M夫はお庭の鯉のぼりをみてきて「お父さん鯉をつくる」という。そばでよくお友だちの活動をみているT子がM夫に「いっしょに作ろう」と申し出て、



いつもあまり接触のないM夫とT子が、ま鯉をつくった。続いて、いつもはあまり積極的でないI夫とO夫がいっしょに参加してきて「それじゃぼくたちは、赤ちゃんの鯉作ろう」ということになり、ここで最初のグループが自然にでき上がった。それに刺激されて次々とグループができてきて、結局、全部で六グループに分れ、或るグループは四人、或るグループは六人あるいは七人になった。内容的にみれば、あるグループは、ま鯉、ひ鯉、子ども鯉、吹流しとにぎやかにつけ、あるグループは子ども鯉がなかったり、吹流しが二つできたりして、それぞれ、各グループの力に応じたものを作った。個人別にみれば、一人で一つ作った人、二人で一つ作った人、またその上にもう一つ作った人、一人でそれぞれ違う相手と二種類作った人、まだ自分で作るというより、方々に顔を出して「手伝ってあげたの」と得意になる人、積極的でなく受身で参加した(数人)などその参加の仕方はいろいろであった。しかし、各グループの作品を丈夫な竹につけて保育

室に飾ってあげ、また各グループで鯉のぼりをもって写真を書したときには、みんな喜び共同製作の楽しさがいくらかでも感じられたようであった。しかし「僕たちの鯉のぼり」というよりは、やはり「これが僕の鯉」という気持の方が全体には強いようであった。

当園では毎年六月に研究会を行なうので、五月下旬より、遊園地あそびを計画した。先ず、子どもたちが遊園地というものにどの程度の関心と知識を持っているかを知りたいと思い、自由に遊んでいる時、二、三人の子どもと絵本の遊園地の絵をきっかけに話し合ってみた。その囲りに集ってきた子どもたちのたいがいが遊園地にいった経験があり、楽しかったことなど話しがはずんだ。いつもひとりで工夫しているいろいろなものを作るS夫が、やがてシーソーを作ってみせにきたので、もぞう紙の上に小さな遊園地を作ってみた。約三分の一が参加し、シーソー、ぶらんこ、鉄棒、ジェットコースター、すべり台、ひこうき、池とボート、池と魚、橋、切符売場など



ができた。四日後「遊園地あそび」についての話し合いをした。「鯉のぼり」の時は、子どもたちの活動の結果が自然に共同製作としてまとまるようにことを運んだが、今度の活動では、子どもたちが計画をたてることに参加するようにしむけ、次の四つの点について話し合った。一、遊園地の遊具、施設について知っているものをあげてみる。二、あげられたもののうち、作りたいもの、作れそうなものを選ぶ。三、自分は何を分担するかを各自がきめる。

四、各グループでどうやって作るかを相談する。このうち一から三までは全員で話し合い、四、については、情況によって私も相談に加わった。結局、汽車、自動車、飛行機、ボート、ジェットコースター、メリーゴーランド、釣堀、すべり台、ベンチ、馬、食堂、劇場などがあげられた。乗物の材料はダンボールの大きな箱が主であったが、一番チームワークのよかったのはボートの組で、三人（男）で相談して「先生、紙ちょうだい」「先の方を紙でこういうふうにするの」ととがらせるつもりらしい。そこでボー

ル紙をあげると「ここをこうするから三枚ちょうだい」という。ボール紙を折って、ダンボールの箱にあてている人、セロテープでそこをはる人など、その協力ぶりには驚かされた。三人でボートを二そう作ったのは二日がかりの仕事だったが、私がかしたの、オールを棒をちようどよい長さに切るのと、それを通す穴を切り抜くことだけであった。

ジェットコースターなども、どうやって作るつもりかしらと思っていたところ、自分たち（二人）のプランができていて、材料をそろえてあげるだけででき上がった。劇場のグループは十三人なので自分たちだけの相談は無理らしく、「紙芝居がいい」「ペープサートがいい」「小人と靴屋の話にしよう」「兎の遠足というお話をつくろう」など、いろいろな意見がでてまとまらないので、私も意見を出し、結局、王さまがさわると何でもパツと金になる（ペープサートの裏を金紙ではっておく）ところがおもしろいと採用されて金の好きな王様の話に決った。ペープサートのやり方も、人形を動かしながら対話をする



普通のやり方を考えていたところ、自分たちで知っている筋に従って自由に練習しているうちに、自然に話をする人と、人形を動かす人とに分れ、その方がやりいと言っているので、そうすることにした。子どもたちの考えで押し進められるところはできるだけそれに従い、行きづまるときは私もいっしょになって考えて計画を進めた。この活動の中で、「メリーゴーランドの馬の頭は紙袋で作ったら?」「釣ったお魚を入れるバケツもいるね」「ジェットコースターのつかまるところ作るから、この位の長さに棒を切ってよ」など、子どもたちは自分の頭で考え、意見を言うようになってきた。遊び方を相談した時も、「遊具の係は組の当番になるといい」「作った人がその遊具の係になるのがいい」と意見が分れ、十一対二十三で後の意見に従うことにした。J夫の意見で、係は二人が適当ときまり、遊具を作った各グループからジャンケンで二人ずつ決めた。研究会には組の子どもだけで遊園地を開いたが、六月十四日には、遊び室で遊園地を開き、他の組の子どもたちを全部招待し

て、大にぎわいであった。遊具の係以外の、組の全員がお客さまの案内係となって小さい人達を世話し、年少組の子どもたちは「後樂園のようだ」と喜んだ。自分の頭でいろいろと考えて意見を言い、計画に参加すること、工夫してものを作ることを、協力して作ること、自分たちで遊び方をきめて、そのきまりに従って遊ぶこと、小さい人たちをやさしく世話することなど、この活動の中で得たものは大きいように思う。しかし中には、「ひとり、で、自動車をつくる」と主張して共同製作を拒んだものの、気持はじゅうぶんでも三人足並がそろわず仕事がかどらないもの、自分の分担したものを作らなければならないという気持が弱いものなどいろいろあったが、それでも鯉のぼりの共同製作の時より一段と進歩が感じられた。この活動の中でも、子どもたちの考えを聞き、それを尊重することは私の心したことであったが、実際、子どもたちは、することを一方的に指示されるより、自分の意見を聞かれとりあげてもらったことを喜び、活動が自主的、積極的になるようであった。



ちようど一学期も半ばのある日こんなことがあった。お弁当によく菓子パンと牛乳を買って持っていくN子が、朝、「今日はお店がお休みで、パンが買えなかったの」と告げた。私は、N子のつきそいの人が家に戻ってお弁当をとどけてくると思ったが、「今日はお弁当がないからたべない」とN子の様子がおかしい。そこで、N子の家に電話をすると「いつも家からのお弁当をいやり、パンを買う、牛乳を買うと勝手を言い、今朝もそれで出かけましたが、こらしめにお弁当を届けまいと思っていました」との返事。とにかくお弁当を届けていただくようにお願いして、N子に何と話そうかしらと考えた。お昼になって、家から届いたお弁当をN子に渡しながら、何気なく「よかったわね。お店のパンよりお家のお弁当の方がいろいろ入っていて」と言ってみたが、N子は沈黙。そこで「毎日お店のパンばかりより、いろいろなものを入れて下さったお弁当の方がN子ちゃん大きくなれるんじゃないかしら。先生はそう思うけどN子ちゃんはどう思う?」「……」「やつぱ

りそう思う?」N子の表情がやつとほぐれて、にこつとなづいた。「それじゃ先生と同じ考えね」と私はホツとした。あとで聞くところによれば、N子は「どう思う?」がたいへん気に入って、家でも、「N子はこう思うけどママどう思う?」を連発。家中ではやってしまったそうだ。それからN子のお弁当は、毎日、母親の手づくりに変った。

二学期はいろいろと行事が多い。運動会、遠足、お芋ほり、子ども動物園への園外保育などで忙しい。しかしそれらと同時に言語の面に力を注いだ。もちろん、今までもしてきたことであるが、組全体で先生の話を聞く態度や、理解、自分のしたいこと、してほしいこと、疑問などがすなおに口に出せるように、これらのことを身につけておきたいと思った。お話をきいたり、テレビをみたりする機会を多くし、夏休みや、遠足の経験などを話したり、テープに吹きこんでそれを聞いて楽しんだりした。また、知っているお話や作ったお話を、ペープサートや紙芝居にして、お友だちにみせ合ったりした。これらの活



動の中で、自分たちでグループを作ったり、その中で役割を受け持ったりする相談は、子どもなりにかなり上手にできるようになったし、自発的に参加しようとする態度もできてきた。みんなにきこえるような声ではっきり話すことは、かなりむづかしいことであったが、二学期の末には、お友だちのペープサートや紙芝居に大分興味を示して、よく聞くようになってきたので、見せる方の拙さもそれで補うことができた。

三学期のひなまつりには、毎年最年長組がいろいろ計画することになっているが、子どもたちとの相談の結果、私の組では劇とペープサートをすることにきめた。とりあげるお話も、子どもたちからいろいろと案が出、私も案を出した。もし大ぜいの子どもが賛成する案があれば、自分の案を引っ込めて、ねりなおすつもりであったが、子どもたちの大部分が賛成し、多数決で採用してくれた。子どもの希望によって、劇とペープサートの二組に分れ、役割も、希望の多いものは子ども意見に従って、ジャンケ

ンによってきめた。今年度の初めの頃はなかなか口をきかなかったM子が、一人で話さなければならぬ役を自分で選んだことは、成長ぶりを感じさせて嬉しかった。子どもたちの意見で、ペープサートは「ばん太の茶釜」とつけ、劇は、出てくる女の子の名前を「ちこちゃん」としたいというので「ちこちゃんのおだんご」とつけた。(内容は「ぶんぶく茶釜」と「おだんごまでまで」を脚色したものである。)自分の役割についての意識は、かなりはつきり持っており、殆どの子どもが自分のお面やペープサートは、大きさやペープサートの心棒のつけ方などを注意するだけでさつさと作った。練習の時もみんな大体の筋をよく理解していて、時々助言したり、言いそびれてしまう子どもに言う時を作ってあげる位で進んだ。「子狸が遊びにいく時、お父さんやお母さんは何ていうかしら」「ばん太さんがやると帰ってきた時、みんな心配して待っていたんですよ。何か言っておけようよ。」きまったせりふなどはない。子どもたちはその場面々々で、自分のことば





▲ペープサート「ぼん太の茶釜」(当時の誌面から)

あり批評家で、「もっと大きな声で」鬼がもっと元気な方がいいわ」「お地ぞうさまふざけるとおかしいよ」「そこ、いっしょにおどった方がいいと思う」などなかなか意見がある。誰かお休みがあると、「私、やってあげる」と、お友だちの役までよく心得ていて、代役を立派にやってのける。「ここで鬼がうたをうたうといい」「鬼の歌、いいのがないの

で考えて言う。二、三度繰り返し返すうちに自分のことはもきまってくるようである。次第にお友だちの役も分ってきて、「ほら、Hちゃんの番よ」とうっかり忘れた子どもにもお互に注意する。劇の練習の時はペープサートのグループが観客で

よ」「じゃあ作れば……」子どもたちはためらいもなく作ってくれた。鬼のことも遊びます。楽隊をしてあそびます。歌ったり、踊ったり、たいこを叩いて遊びます。鬼の子たちは嬉しそう「誰か歌って下さる?」「それくらい先生がしてよ」とY夫。「そうね」と思わず笑ってしまったのも、ついこの間のことである。卒業の頃には、先生と子どもというより、お友だちのような親しい気持だった。私も、迷う時、困った時には、よく子どもたちに相談し、いっしょに考えたものだった。「ひなまつり、お上手にできるかしらね。」「先生大丈夫よ。うまくいくわよ。」ずい分と手のかかる子どももいたし、いろいろなことがあったが、別れてみると本当に頼りになるよい子どもたちだったとしみじみ思う。自分の頭でものを考え、自主的に活動し、人と協力でき、負けずに困難をのり越えていく子ども、そんな子どもになってほしいと心から願う。

〔『幼児の教育』第六十三巻第六号より〕





# ◆保育を構造としてとらえる

先の鈴木氏の言っていた「本番で大人の生活に参加させる」保育など、現代の私たちの課題につながる主題が散見されます。給食作りや掃除など、生きていくために必要な労働を保育者が担い、子どももそれに参加して生活をつくる。こうした実践は、

一九三〇年代の新教育風でもあり、また現在注目される「正統的周辺参加」<sup>注</sup>の学びとも受け取れます。

鈴木氏が「保育五項目から言いましたら、これは何なんでしょうか。手技とも言えないし、観察だけでもございませし」と、当時の保育理論の中で保育を構造としてとらえつつ、しかし既存の領域概念では自分の実践を説明することができないと言っている点については、今後の保育カリキュラム研究において考えさせられる内容でした。

同様に、ここに再録した村石氏、関氏、守永氏の記録においても、それぞれの年齢の子どもに保育者が求めていること、子どもとの距離のとり方など、


今こそ考えさせられる内容がたくさんあるように思われます。これから、ネット版『幼児の教育』を活用し実践記録を読みつつ、保育の構造について考える機会が増えていくことを願っています。

（お茶の水女子大学非常勤講師）

## 注（参考文献）

- 1 渡邊保博「いま、保育実践史に学ぶ意味」  
『保育実践のまなざし』かもがわ出版 二〇一〇年  
p. 218-228
- 2 中野光「教師が実践記録を書くとき」  
（本荘正美『新たな自分に出会うとき』新読書社  
一九九五年 p. 12-18）
- 3 田中耕治『時代を拓いた教師たち』日本標準  
二〇〇五年 p. 14
- 4 佐藤学『教師花伝書』小学館 二〇〇九年 p. 44-47
- 5 浅井幸子『教師の語りと新教育』東京大学出版会  
二〇〇八年
- 6 J・レイヴ&E・ウエンガー著／佐伯胖訳  
『状況に埋め込まれた学習―正統的周辺参加―』  
産業図書 一九九三年





# 園のくらしを育む 11

## 子どもたちの姿 (1)

— 知恵が生きる協働の過程 —

秋田喜代美

### 1 協働する遊び

集団保育の場である園だからこそその経験を子どもたちにも保障したい。保育所保育指針、幼稚園教育要領において、協働で目的を生み出して展開していく過程を大事に育てていくことが記されている。五歳児後半の時期、特に一、二月ごろにさまざまな園を見せていただくと、子どもたちの関係の形成がよく見えてくる。好きな遊びをめいめいに行っていると感じるクラスから、相互のつながりがついて一体感がもっているクラスまでさまざまである。協働の遊びを先生が働きかけて行うこともあるが、それがその後、子どもたちの中でどのように展開するかが大事だろう。以下は、お店屋さんごっこをみんなで行った翌週の、担任の先生の実践記録である。




お店屋さんごっここの翌週、家で覚えてきた立体の星を持ってきたA児。興味を持った六、七人が集まり作り始める。五角形におりあげてもうまく膨らまないものがある。「できない」「膨らまない」という言葉に、「お母さんでもできない時、あるつけど」と応えるA児。教師は「Aちゃんのお母さんでも、うまくできない時あるんだ」と聞き入る。そのうちB児が「できない」と言い、立ち上がる。「できないって思えばできないし、できるって思えばできるんだよ。お母さん言ってたよ」とC児に言われ、B児は戸惑ったような表情をしていたが、その場に留まる。その日は作れなかったが、翌日作り上げたことを喜んで教えてくれた。「諦めないでよく頑張ったね」と教師が感心すると「教えてもらったの」と友達がいたから自分が頑張れたことを実感しているようだった。作れるようになったことを喜んでたくさん星を作り、A児とB児がお店屋を始めた。立体にならなかった星に「おまもり」と書いていたことに感心して手に取ると、「二人で考えたの。だってもったいないんだもん。ねえ」とおまけにするというアイデアに満足していた。

(五歳児二月―関市立萩荘幼稚園 佐藤美喜子先生記録より)

自宅でお母さんやお姉ちゃんが作っているのを教わって覚えてきた星を折るといふ「少し難しいもの作り」が、A児によって園に偶然にもたらされたことから、その製作に





みんなが興味をもってその場に集まってきたことがうかがえる。と同時に、B児のようになにがきりめがちな子どもも、この友達の言葉に支えられることで、挑戦を続けられていることがわかる。折るという活動自体は一人ひとりで行うものである。でも、場を共有し、みんなと同じことを行っていること、かつ自分に対して友達が親身になって語ってくれること、活動が魅力的なことの三要素があることでその場にとどまることができている。そして、園ですぐにできなくても、家でも取り組むという挑戦への意欲が生まれている。一つの場合でみんなと同じことをしているだけではなく、同じ思いをもって取り組み、心のつながりが生まれていく過程が見えてくる。これがクラスの中で培われてきた協働の表れといえるだろう。

## 2 子どもの知恵が現れ共有される言葉

この事例を私自身がおもしろいと感じたのは、お店屋という相手のある活動だからこそ、立体にできなかったものをおまけにするという機転がその場で生まれていることである。おそらく、このおまけのアイデアは一人が思いつき、片方が提案に同意するプロセスで行われたに違いないが、「二人で考えたの。だって、もつたいないんだもん。ねえ」と二人で考えたと伝えている。しかも共同主観性を生み出す「ねえ」という終助詞を付している。その前の日には折ることもできなかったB児がA児とつながり、この遊びを共に行ってい



ると宣言している。このA児の知恵がさりげないひと言の中に現れている。

またB児ができない時に「お母さんでもできない」と励ますA児。「できないと思えばできないし、できると思えばできるんだよ。おかあさん言ってたよ」というC児の言葉は、病床で病氣と闘っている母親を日々見守っているC児だからこそ、おそらく出てきた言葉であることを担任の先生から伺った。C児は五歳なりに母親の姿や言葉から人生の知恵を学び、母の言葉を自分を励ますだけではなく、友達を励ますためにも即興的に使うことができているのだと感じた。協働は、一つの目的に向かって協力したというだけではなく、その過程で生じる子ども相互の即興的な機転や日々の知恵が共有される。だからこそ、達成される目的だけではなく、さまざまなことを相互に学び、互いに信頼や敬愛を深める機会をもたらししている。活動全体をグループで分業する方法のように協働する遊びが語られることに対し違和感をもつ私には、子どもの間で生まれたことが大事に心にとどめられ記録される保育者のクラスだからこそ、この子どもたちの協働が経験の積み重ねから生まれてきたのではないかと感じられた。

(東京大学大学院教授)

#### 引用文献

佐藤美喜子 二〇一〇「一人一人が自己を発揮し、友達とのかかわりを深めるための環境の構成と援助はどうかあればよいか」第57回全国公立幼稚園教育研究協議会報告書 p.30、31



## 保育の現場から

「いわれること」と

「新しく始めること」

宮里暁美

### 積み木を積む子どもたち

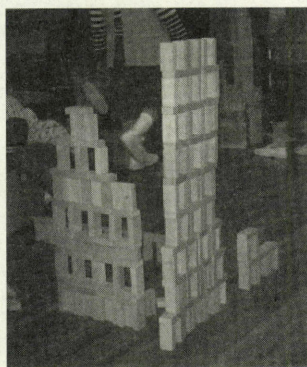
年長組の一学期、保育室の中で小さな積み木を丹念に積んでいる子どもたちがいました。積み木の間を等間隔に空けて並べ、さらに上に積み重ねていく（写真1）。それは、ほれほれとするような美しさでした。

「すごいねえ」と呼びかける声も思わずささやき声になってしまふほど、そこには静かな集中した時間が流れていました。思わず引き込まれて遊びの様子を見てみると、ふとした拍子にガラガラッと積み木が崩れて

しまいました。

「ああ……」というつぶやきとともに残念だなあという思いが私の中に生まれたその時、全く同じタイミングで子どもたちの中からも「わあ！」という声が上がりました。でも、そこには、私の声とは違う何かが含まれているように思いました。明るさと笑いに包まれた何かです。

「おや？ 何だか私の思っていることと違う……」そう思って子どもたちの様子を見ると、バラバラに崩れてしまった積み木の中から、もうすでに積み木を手



▲写真1：積み木のタワー



取り「また作ろう！」と声をかけあっていました。そして「どういうのにする？」と相談しながら、先程とは違う積み方を始めていったのです。

生き生きと慎重に積み木を積み始めた子どもたちの姿を見ながら、私は大切なことがわかったような気がしました。子どもたちにとって、作りかけていたものがこわれることは、挫折ではなく新しい何かを作り上げるきっかけになっている。遊びの中で、子どもたちは新しく立ち上がる経験、つまり再生の経験を重ねているのではないだろうか。そのことは、遊びの中で味わうことができるとても大切な経験なのだろう。

子どもたちが遊んでいる様子を見ると、そこにはさまざまな様相が次々に現れてくることに気がきます。ある所までいったかと思う時、場面は急激に展開します。何かを実現しよう、形作ろうとして始めた遊びが子どもたちの中で存分に楽しまれている過程の中に、幾度となく「こわれる」瞬間が訪れます。その瞬

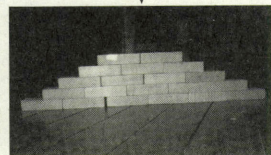
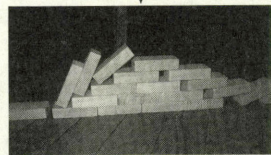
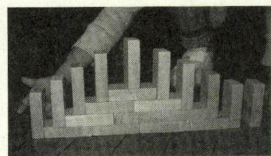
間に子どもたちが体験しているのは、単なる挫折ではなく、もっと生産的な思い、ワクワクした思いとつながっているのだということを、子どもたちの姿から気付かされたのです。

### こわれた時の発見から「飛躍」が生まれる

遊びの中の「こわれる」ことの意味について考えるのがおもしろくなってきたところに、さらに印象的な遊びに出会いました。年長組のJ夫が小さな積み木をまるでピラミッドのように積み上げていたのです。それは、とても美しく緻密な作業でした

保育後、職員室はJ夫の積み木のことで持ちきりになりました。J夫の遊びをずっと見ていたY先生が、初めは階段状にドミノ積み木を並べていたこと、積み木が倒れて斜めになった所を平らにしていくと一段高くなったこと、それを繰り返しているうちに大きなピラミッドの形ができていったという経緯を教えてください





▲写真2：ピラミッドができるまで

ました。写真2のように階段状のドミノ積み木が倒れてできた形からイメージし、また並べて、ということ を繰り返していったということでした。

数日後、J夫はまたコート室でピラミッド状に積み木を積み上げていました。コート室は玄関に近く、通りかかった誰もが、思わず立ち止まって歓声をもらいましたが、用が済むとたいいていの人は立ち去るため、その後はひっそりします。

静かな中で、ゆっくりJ夫は積み木を並べていきました(写真3)。私が、カメラを構えながら見守っていることも、J夫の支えになっていたのかもしれませんが。

J夫は落ち着いて作り進めていきました。そして、J夫の指先がほんの少し積み木に触れたその時、積み木はパタパタッと倒れていきました。

かなりいいねいに作られていたドミノ倒しでしたから、きれいに倒れていきます。ピラミッドの途中までパタパタッと倒れ、そこで止まりました。

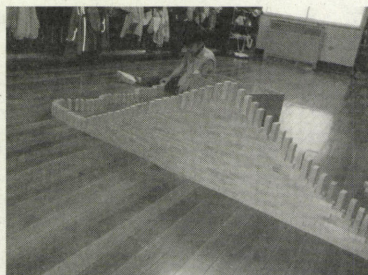
J夫の目は、倒れていく積み木の動きをしつかり追っていました。そして、途中で倒れなくなった箇所を確認すると、倒れていない積み木をそっと指先で押して倒していきました。斜めに倒れている所は、平らになるように直していくと(写真4)、そこには前より一段高いピラミッドができあがっていました。それは、まさにY先生が説明してくれた通りの状態でした。

J夫は、ブロックや積み木など立体的な構成遊びに興味をもち、よく遊んでいた子どもでした。作ってはこわし、また作る経験を人一倍重ね、飽きることを知りませんでした。そんなJ夫だからこそ、と思える遊





▲写真4：斜めに倒れた積み木を平らにしている



▲写真3：ピラミッドからドミノが続く

びでした。J夫は、状況が変化した時に、そこに立ち現れる興味深い状態、それを見逃さない目をもっているように思えたのです。

階段状に並べた積み木の上に、積み木を立てていく。その積み木が倒れたあとが、まるで階段のようになっていく！ ということに気付き、J夫はおもしろさを感じたのでしよう。大事なことは、おもしろさを感じたJ夫がそこで止まらないと

いうことです。J夫は同じようにやってみます。今度は意図して同じ状況を起こすのです。このようにして何回もやっていくうちに大きなピラミッド型ができあがったのです。先に完成図があるのでなく、小さい思いつきを重ねていくうちに、あっと驚くようなものができあがっていく、これが子どもたちの遊びの歩み方ではないでしょうか。

「こわれないようにする」「ことと」「こわす」「こと

十月、J夫がH夫、S夫と一緒に、遊戲室でゲームボックスを使って迷路を作っていました。全てのゲームボックスを組み合わせて終えた時、J夫は迷わずワッフルブロックを



▲写真5：迷路（手前がゲームボックス、奥がワッフルブロック）



持つてきました。ワッフルブロックを使って迷路の続きを作る時には、仲間がさらに増え六人ほどで作り進めていきました。分かれ道や行き止まりを作り、そのた  
びに相談しながら力を合わせて迷路を作っていました。

迷路は子どもが通るのがやつとという狭さです。

匍匐前進のようにして進むのがおもしろく、何度も通つては遊び、そのたびに少しずれたり、こわれそうになったりするのを丹念に直しながら遊んでいました（写真5）。

しばらくして、片付けの時間になりました。「午後まで残しておきたい」という声が子どもたちの中からあがり、先生にも相談に行つて、残しておいてもいいことになったその時、J夫が「ワッフルブロックだけは片付けようよ」と言い出しました。「こっちは、また違うように作ればいいから」と言うのです。ほかの子どもたちからも、特に異論は出ず、すぐにワッフルブロックの片付けが始まりました。

組み立てていたものをバラバラにしていく。先程まではこわれないように何度も直していた所を、思い切り力を入れてこわし、色別に収納するカゴにしまつていく。形作られていたものが、元の場所に納まつていく。こわすこと、そして、元の場所にしっかりと納めることが、次の新しい創造のスタートラインなのだということが感じられた瞬間でした。

ゲームボックスとワッフルブロックを使った迷路遊びは、人が中を通るので頑丈さが求められていました。ゲームボックスはまさに頑丈な遊具です。一方ワッフルブロックは、しっかりと組み立てればある程度は頑丈になるけれど、力がかかると形が崩れてしまうものさがあります。頑丈さともろさ、しかしそれは視点が変われば違う特色となります。ゲームボックスは縦横につなげるだけなのに、ワッフルブロックは組み合わせ方が豊富でさまざまな形を作ることができます。頑丈だけれど変化が乏しい遊具と、もういけれど造形の



おもしろさがある遊具、それを組み合わせることで迷路はできあがっていたのです。

頑丈なゲームボックスで組み立てた所をスタートにし、ワッフルブロックで作った通路がその先にあるというコースにしていたことから、Ｊ夫たちが遊具の特色を理解していることがわかるような気がします。だからこそ、子どもたちはワッフルブロックだけを片付けようとしたのではないのでしょうか。

こわれやすさときあいながら、こわれないように作り上げていたものを、決然としてこわす。そこで子どもたちが体験していることは、また作ろうという思いや期待なのだと考えます。

### 「こわれる」時に響く音

「こわれること」の中で子どもたちが体験していることに心ひかれ、遊びを見つめている中で私の心に残ったことがあります。それは「音」のことです。

組み立てていた小積み木が崩れた時のバラバラッという音、長く並べたドミノが倒れる時のパタパタというリズムカルな音、砂場で深く掘り進めていた水路が水圧で決壊した時のズブズブという鈍い音、それらと重なるようにして沸き起こった、弾けるような子どもたちの笑い声、それらは集中していた時間があつたからこそ響いたとも思える柔らかな心地よい音でした。大型積み木が崩れた時の身がすぐむような大音響とは全く違う音でした。

集中して取り組んでいたからこそ、軽やかな崩壊の音に気付くことができたし、心地よくこわれる体験を友達と共有したからこそ、再生のエネルギーが沸き起こるのかもしれない。遊具や素材の特質、遊びへの集中度、友達とのかかわりにも注目しながら、「こわれる」ことの意味、「こわれる」ことと「新しく始める」ことのつながりについて、さらに考えていきたいと思っています。

（お茶の水女子大学附属幼稚園副園長）



## 編集後記

「こわれること」が「新しく始めること」とつながり再生のエネルギーの沸き起こりとなっているという、非常に興味深い遊びの様を宮里先生が論じています。これは、アーカイブズ特集号を通して新しい『幼児の教育』の道を見いだそうとする私たち自身へのうれしいエールと受け取りました。

昭和から平成への替わり目に編集主幹を務めた本田和子先生が示唆されているように、本誌の発行リズムをどうするか現在検討中です。1世紀以上にわたって『幼児の教育』は年12回発行されてきました。ひと月とは、月の満ち欠け、女性の生命リズムでもあり、月案は見通しと振り返りのききやすいタイムスパンの上にあります。さて、3か月を束ねた季「節」とは、保育誌のリズムとしてどうでしょうか。(H)

## 幼児の教育 第110巻 第2号

平成23年 2月1日発行  
編集兼発行人 浜口順子  
編集担当 金子めぐみ・田中恭子  
発行所 日本幼稚園協会  
〒112-8610  
東京都文京区大塚2-1-1  
お茶の水女子大学附属幼稚園内  
発売所 株式会社フレーベル館  
☎03-5395-6604 (編集)  
振替 00190-2-19640  
印刷所 図書印刷株式会社  
定価 550円 (本体524円)  
©日本幼稚園協会 2011 Printed in Japan

編集協力 フレーベル館  
表紙絵 後宮ひろみ  
扉題字 津守 真  
本文カット 田崎トシ子  
編集スタッフ 吉岡晶子  
佐藤寛子

ご購入のお問い合わせは、  
フレーベル館までお願いします。  
☎03-5395-6613 (営業)

## 次号予告

〈特集〉 創刊110年企画

『幼児の教育』アーカイブズ集 3

・本誌歴代編集主幹による

「『幼児の教育』にかけた思い」(3) 津守 真

☆次号の内容は、都合により変更される場合があります。

『幼児の教育』バックナンバーがネットでご覧になれます！

お茶の水女子大学附属図書館のHP上、教育・研究成果コレクション"TeaPot"

<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/handle/10083/3705/bulletin/>

へ、アクセスしてください。

明治34年発行の創刊号から、現在、平成19年発行の第106巻まで公開されています。ご意見・ご感想などは、youjimap@yahoo.co.jpまでお寄せください。



55冊の絵本紹介！ 読み聞かせのアイデア、エッセイまで！  
読み聞かせの達人による、絵本ガイドブック

# 聞かせ屋。けいたろう 絵本カルボナーラ

～ おいしい絵本を召し上がれ！ ～



## 絵本を子どもにも大人にも！

著者が読んできた秘伝の 55 冊の絵本を、オールカラーで掲載。作品紹介、読み聞かせの Q&A からテクニック紹介まで。読み聞かせの活動を通した、新たな絵本の魅力が満載の 1 冊！

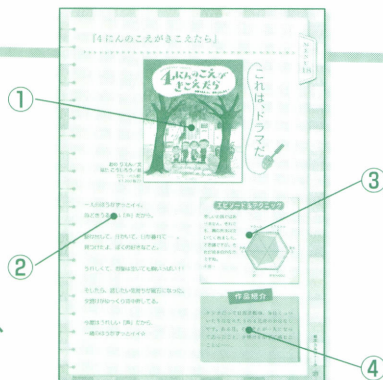
聞かせ屋。けいたろう／著

21×15cm 96 ページ 定価 1,260 円 (税込)

10921

作品内容、読み聞かせのエピソード&テクニックや、はたまた、読み聞かせ実況中継まで！  
素敵な絵本との再会をお届けします。

- ① 絵本表紙
- ② けいたろうコメント
- ③ 読み聞かせのエピソード&テクニック、作品データ
- ④ 作品紹介





好評発売中

## “森のようちえん”での活動を撮った18万枚の写真から厳選！ 保育・子育てのエッセンスが詰まった写真集

### 子どもと森へ出かけてみれば

小西貴士／写真・ことば

自然の中で子どもたちは  
こんなにいい顔するんだな

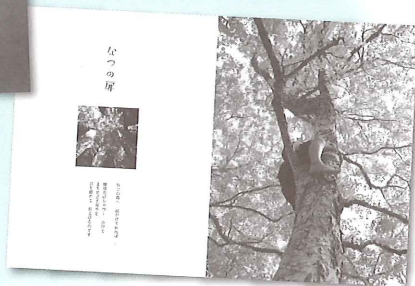
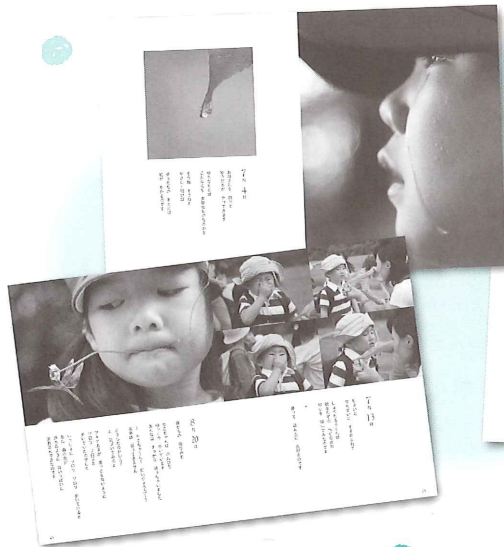
いろんな葉っぱがあるけれど  
同じ葉っぱはないように  
あなたはあなたのままでいいですよ  
そのまんまが素敵です  
森は、そんな風が吹いている場所  
ページをめくり  
森のお散歩を楽しんでくださいな



24×18cm 76ページ 定価 1,575円(税込)

10920

オールカラー



- 四季の森で育つ子どもたちの写真とやさしいことばで織り成すとおきの世界
- 巻末「子どもと森へ」  
寄稿：汐見稔幸氏、上遠恵子氏、細谷亮太氏

キンダーブックの  
**フレーベル館**

定価 五五〇円(本体五二四円)☆

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。